ベクトルマン

連打

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ベクトルマン

【Ｎコード】
Ｎ４７９９Ｘ

【作者名】
連打

【あらすじ】
オタク高校生のサバイバル学校生活。
恋も友情も足掻きながら上手に切り抜け、目指すは平凡なＮＰＣ。
『ようこそ○○村へ』的なポジションをこよなく愛す彼に立ちふさがる恥ずかしいイベントの数々。
赤面黒歴史のコメディーライフです。

1

「はっ……ッはっ」

冷たい風にビンタされながらひたすら左右の足を交互に押し出す。じゃりじゃりと不安定な足音だけが頼りなく耳に届く午前5時。

「は……はっ……」

かっちり着込んだウインドブレーカーとぐるりと首に巻いたタオルは僕の体温を効果的に押し上げ、まるでセイロの中のショーロンポーにでもなった気分だ。

「……はっ……」

世界はちっぽけな僕なんかにはまるで興味ありません。僕がここで今過呼吸でぶっ倒れても暴走ベンツに跳ね飛ばされたところで……太陽はつるつる昇るし矢口〇里はあいかわらず空気を読みすぎて自滅するんだろう。

「……」

自分の呼吸で窒息ってすごいよな。今僕そんな感じ。前例とかあるのかな。えっ？世界初？うそ？取材とかされちゃう？

「キモ……なにブツブツいってんのよあんた」

僕の内面世界はこの世界において唯一安住の楽園。ユートピア！サンクチュアリ！ディズニーランドなのに！音も無く自転車で追走してくるクサレ３Ｄ女は僕に精神攻撃を仕掛けてきた。

「あんたがせめて見た目だけでもまともになってくれないと私が困るのよ。もう中身は問わないから。お願いだから」

すいすいと電動自転車のペダルを軽やかに回し、気持ち茶色がかった長い髪を風に泳がせるクサレ３Ｄオンナ。属性は姉。朝は優しく起こしにも来ず弁当も作らない。胸だって背中みたいだし態度もデカイ。

そして……致命的に血縁関係が立証されていた。価値ナシ。逝け。早く。

「……見てんじゃないわよ。ムカつくわあんたの眼つき」

こっちは酸欠でそれどころでは無い。それにその手の罵倒など聞き飽きている。

曰く『豚野郎』。

曰く『豚足もどき』。

曰く『ぶたまん喰うか？』。

結局は『ピッグマン』辺りで落ち着いたと記憶している。要はまず外見がブタなのだ。自分でもヒヅメが付いてないのが不思議に思った程に。

「だから見んなってば！寒気がするの！」

それほどまでに嫌っている僕に毎日毎朝付き添う姉。決して兄弟愛的な要素が混ざり込んでいるわけでは無い。まあそんな得体の知れない不純物入れてもらっても困るんだけど。

「はっ……はっ……」

この姉は……なんと高校では美人優等生のイメージを貫いているらしい。清楚で可憐な女子高生なんてものが絶滅危惧指定種なのは知っていたが、もうとっくに絶滅してるんじゃないだろうか？こんな売女寸前のクサレビッチがたとえ偽りであってもそんな大それた看板を掲げているなんて。

そんな姉の砂上の楼閣は今まさに僕の進学によって粉砕されようとしている。

故意ではなかったのだが……推薦で早々と決まった僕の進学先が姉の通う高校と同じだったのだ。

「きゃあああああああっ！！」

絶叫。

姉はその事実を耳にした時、日常生活では決して聞けない程の断末魔をひねりだした。

「ふざ……けんじゃ……」

ああ……これが殺意ってやつかあ。あ、今歯軋りの音聞こえた。アニメみたい。カッケー。姉△。

僕が姉を眺めながら正体不明の黒い愉悦に浸っていると、ピンクなローターみたいにプルプルしていた姉は唐突にゴトリとした質量を伴った呟きを僕の足元に転がした。

「走れ」

押し寄せる圧迫感に息苦しくなる僕。
覇気？ねえ覇気？

「あんた明日から。……入学式まであと半年」

推薦だからね。まだ9月だもんね。

「その……醜い体……そぎ落としてやる」

世間体とか体面とか面子といった、僕がいつか落っことしてきて振り返りもしなかったモノの為。
長いこと僕には目も合わせなかった姉がS属性を纏わり付かせながら亀裂のような笑みを浮かべる。

「その醜い体そぎ落としてやるっ！！」

ビシッと僕の鼻先に人差し指を突き出す姉。
まったく同じことを2回言ったサムさは……今突っ込んだらダメ。
それくらいはいくら僕でも分かる。

「はっ……はっ……」

と、まあ。
要はダイエット。
食事はササミと野菜で足りないビタミンは錠剤で補給。肌はカサカサになっていきすっかり胃も縮小した。ナタで叩き切るような大雑把な体重撲滅プログラムはすでに5ヶ月を超えている。

姉が付いてくるのは僕がサボらないよう監視するためだった。事実最初の内は歩いて回るのもキツかったコースが今は半分の時間で走りきっている。

いつものコースを回り終わりぺたんと腰を下ろした。胸元からイタリア人のようにムワっと熱気が立ち昇りとても不快だったがカプチーノは嫌いじゃないなあ。そういやしばらく甘いもの飲んでない。

「何キロ？」

僕を突き抜け後ろの風景を見ているような硬質な視線で僕に声を掛ける姉。話すのも嫌なのだろうし、気持ちは分からなくもないし、今に始まった事でもないけど。

「６１．５」

ダイエット前は１１２キロだった。毎日体重計にむりやり乗せられていたが最近は姉の監視もユルイ。把握してなかったみたいだ。

「……そう」

興味なさそうに吐き捨てると姉はペットボトルをポイと投げて寄越し自転車を漕ぎ出した。

僕は小さくなっていく姉の背中を見ながらゴロンとアスファルトに寝そべる。姉に初めて貰ったペットボトルはウーロン茶のようだ。

「……」

僕はそのウーロン茶をウインドブレーカーのポケットにねじ込むと、

膝に手を突いて立ち上がる。

もうすぐ入学式だなあ。

今さら学校生活がリア充化するなんて望みはないし、赤面症のＰＣスペック厨だし、エロゲーよりギャルゲーが好きなヘタレオタクな僕は……それでもユニクロの『Ｍサイズ』が着れるようになった。友達一人も居なくても、劣等感が背中に貼り付いてぜんぜん取れなくても、ひとの目を見て話せなくたって。

つるつる昇って来た太陽を眺めながら、僕は

『〇〇使いの夜』の発売を心から願った。

2

ペットボトルを投げて寄越した日を境に姉は僕のランニングに付いて来なくなった。
寂しいとか物足りないとか甘酸っぱい系の感想があるわけではないが張り合いは確かに薄くなっている。春休み中なので誰に会うわけでもないし。いや、学校行ってたとしても誰かに気に留めてもらえるわけでは全くないんだけど。

「なに泣いてんだ？」

自宅マンションの下で柔軟体操をしていた僕に声を掛ける背の高い男性。１９０センチを超える長身から見下ろされるというのはかなりの敗北感を伴う。
古い電柱のように自然にそこにあり、気にしだすと圧迫感は天井知らずに跳ね上がる、不思議な存在感を持つこの男性……戸籍上は父だったりする。

「泣いてないよ」

僕の返事を聞いてるのかハナから聞く気がないのか、『父』はスーツの裾をはためかせ僕に軽く手を振り出勤していった。
ヤツはどう客観的にみても、間違いなく変人の類の人種だ。
小学校３年の時に新しく僕の姉と僕の父となったヤツは何も押し付けず、飾らず、淡々と僕らの相手をしていた。

姉は今でもヤツに馴染めないらしくほとんど会話しないし、ヤツは相変わらず飄々と生活を送る。
そんなヤツが意志をはっきり示したのは今までに一回だけ。

他界した母の実家に引き取られようとする僕と姉。それが普通だし自然。
親子と認め合うには6ヶ月という時間は短すぎた。
親戚中誰もがそう思っていたし僕と姉もそれが当然だと思っていた。
たった半年一緒に暮らしただけの限りなく赤の他人の僕らに向かって……

ヤツは言った。

「自分の子は自分で育てる。お前たちは俺の子供なんだから。見ろこれ、ほら」

ヤツの手にはヒラヒラと戸籍謄本の写しがはためく。

「ここ。ここにはなんて書いてある？」

突き出された戸籍を目の前に差し出され多少うろたえながらも姉は言葉を吐き出す。

「……長女」

「そーだ！お前は俺の長女！でそこの肉団子は長男ってわけだ！文句あるやつは今なら受け付ける！」

親戚一同を長身から見下ろしヤツは腕組みをした。って誰が肉団子

だ。

シンと静まり返る畳敷きの大広間。

「君……少し冷静に……」

「却下だ！」

異議を受け付けると言った１０秒後に気持ちいい程の完璧前言撤回。

まともな大人のすることじゃない。

その後、何度か話し合いの場が持たれたようだが結局ヤツは主張を曲げなかった。『父さん』と呼ばない息子と『父』と認識していない娘を引き取り生活することがヤツにどんな意味があったのかは今でも分からない。

相変わらず姉は家ではフィギュアのように表情を変えないし、僕はいじめられっこ寸前のデブオタク。

干渉しないのはヤツの美徳ではあるが、昔は何を考えてるのか全く分からず恐怖さえ抱いていた。

実はデブ専のショタ野郎で虎視眈々と付け狙われてるんじゃ……と貞操の危機さえ感じていたものだ（キリッ）

夜中恐ろしくなってしまい姉の部屋に相談しにいくと「脂汗拭け。そして失せろ」と助言をもらったのはいい思い出。

姉はツンギレの走りである。

デレない事にブレがない。

姉△。

「ちょっと……」

意識を幼少期に飛ばしていた僕は姉の接近に全く気づかなかった。
本人にだけしか分からない黄金比によって微かに短くなったスカートと品のあるピカピカの革靴、謎のイイ匂い。
いつものことながら隙が無い。

「ご飯あるから。父の残りだけど」

姉はヤツを『父』と呼称し距離を縮めようとはしない。あくまで属性としての呼び名を頑なに堅持していた。
しかし今、問題はそこではない。

「私今日学校あるから。あんたも明日入学式なんだからちゃんと準備しときなさいよ」

「……」

「……なに？」

「優しい……から気持ちが悪い」

正直な感想だった。
僕の身に何が起きているのか？姉にどんな心境の変化が起きたのか？ちょっと寒気がしてきました。はい、ブツブツとチキン肌。

「……ごめん。よく……聞き」

「キモチガワルイ」

「もう一度……」

「キモチガワルイデス」

軋んだ笑顔の姉の眉間に国境みたいな一本筋の通った皺が刻みつけられていく。しかし今止めるわけにはいかないのだ。姉をいつもの姉に戻すのだ。なぜなら姉は……

血が繋がった3次元のメスなのだ！（ババーン！）

さあオタの誇りと矜持をその手に掴め俺！傷ならこのあいだこっそりａｍａｚｏｎで買った抱き枕に癒してもらえ！

さあ！池！

「キモ」

「あんたのあの絵が付いた変なシーツ捨てといたから。やめてよね気持ち悪い」

「うあああああああああっッ！！なんだようっ！！やめてようっ！！」

「……ツライ？悲しい？」

くすくすと満足げに会心の一撃を繰り出し学校へと去っていく姉。

ピンポイントに心を抉られた僕はがっくりと膝を地面に突き刺した。

あと涙でタ。

3

以外たい。

間違えた。

胃が痛い。

なるべく考えないようにしていた入学式初日の朝、僕は原因不明の難病とひとり格闘していた。

枕に頭を押し付け悶える様にうめきを押しつぶす。

遮光カーテンからわずかに漏れた突き刺すような朝日は僕を更に窮地へと追い込む。いやおうナシの現実と待ったナシのターイムボカーン。敵はあまりにも強大で容赦なく、僕の微々たる魔法力などまったく役には

「いつから魔法使いになったのよ。設定キモい」

なぜ？

はて？

敵の幻覚攻撃は更にエスカレートしているようで、姉の姿をこんなにも正確に投影している。確かに僕は姉に頭が上がらない。いや、本気出せばメスの一匹二匹どうってことないよ？いやほんとにほんとに。

「さっさと起きなさい。遅刻するわよ」

シャッ、と勢い良く結界（カーテン）が破られた。それこそ年単位で築いた僕の完璧な固有結界（遮光のカーテン）をいともたやすくものの数秒で……姉……恐ろしい娘。

「ってなんで僕の部屋に!?なにしてんのっ!?」

ふとんを跳ね飛ばし異常事態に対処すべく立ち上がる僕。

「あんたは入学式とか始業式になると仮病使うからね。わざわざ起こしに来たんだからありがたく起きなさい」

仮病ではなく精神攻撃なのに。何度言っても理解しようとしないメスブタめ。ここが戦場だったら至近距離で罵倒してやるのに。あ、もちろん僕が上官役ね。

「父も待ってるから。早く来なさいよ」

口汚い捨て台詞（意訳）を吐き静かに僕の部屋を出て行く姉。僕の部屋なんて入ってきたのはもう覚えてないくらい昔、しかも一度きりだったはず。母さんが死んだときだけだった。

え?死ぬの?姉死ぬの?

……。

ま、それはそれ。

さて……僕は強大な敵とのバトルが大変な事になっていたのを思い

出し、もぞもぞと温もりの残る戦場へ帰還すべくふとんを翻そうと

「マジで早く来ないと……怒るから」

「うんすぐ。すぐ行く」

僕の部屋の扉の隙間から姉の詠唱した魔法により僕は迅速に着替えを開始させられた。だってマジじゃんあいつ。マジで怒んなくてもいいじゃないですか。

「っと」

とてつもない違和感。
鏡の前に見知らぬ人影。

「……」

なんだ僕か。
そういえばこの姿見を覗き込むなんて何年ぶりだろうか？部屋にあるのは知っていたが使い勝手の悪いハンガーの役目しか果たしてなかったな。

「……」

見れば見るほど違和感が首をもたげる。なんせ半年前までの体から丸々一人分の体積が消えうせているのだ。最近では食事の時に汗をかかなくなったし、股ずれも消えた。なんか鼻息も荒くなくなった気がするし。
毎朝食べてたカレーパン４個。思い返しただけで胸焼けがした。

なにより重宝するのは体が軽いこと。これなら満員電車で露骨に嫌そうな顔をされることも、長い階段で圧倒的な絶望感に襲われることも無さそうだ。
定食屋で頼まなくても大盛りにしてくれる『デブ育成プロジェクト』に参加させてもらえなくなりそうなのがちょっとイタイが。

「……いい度胸してんじゃないの」

「すぐ！もう行くから！」

隠密スキルの高い姉は怒っていた。僕は即座に従順に姉にへつらい付き従う事で危機を回避することにする。

だってマジじゃん。

マジ怖いじゃん。

4

無難に朝食を済ませた僕と姉はなぜか仲良く連れ立って登校中。
朝の清々しい空気とは無縁な殺伐とした気配を身にまとった姉は僕の方をノールックで言葉だけを寄越した。

「あんた趣味は」

「へ？」

「いいから答えな。趣味は？」

イライラしている。姉は誰が見てもイライラしている。
媚びろ！へつらえ！
僕の中のちっちゃい僕が絶叫する。

しかし僕は男だ。いや、漢なのだ。そんな情けない真似はできん！

「……趣味は？」

「ギャルゲー。たまにエロゲー」

危機管理りミッターが勝手に作動した！？恐るべきは姉！このメスめ！思わず正直に答えてしまった！

「好きな食べ物は？」

「カレーパン。衣に油いっぱい吸ったやつ」

今食べられるかと問われたら自信ないが。

「お姉さんはどう？」

「……どうって？」

自分の事をどう思っているか聞いているのだろうか？

なんだ、このメスブタ。

僕にどう思われてるのかが気になるのか？ああん？

「思ったことを答えるのよ。さっさとして、時間ないんだから」

「バイタ。たまにメスブタ」

さあ落ち込め！

丸々と肥え太った可愛い弟に忌み嫌われているのを心に刻み込んで崩れ落ちるがいい！

「……」

おお！

小刻みに震えておる！自責の念に駆られ後悔に苛まれておるわ！

はーっはっはっはっは！！！！

苦しめ苦しめい！！無残に抹殺された僕の智花ちゃん（抱き枕）の苦しみはこんなもんじゃないぞ！

ぐにいっ！

「はぶッ？」

僕の頬を鷲掴みにした残虐なメスブタは今日初めて僕の目を射抜くように見詰め、少しだけ笑った。

「あんたの処刑は帰ってからにしとくわ」

こいつ後悔してないよ？自責の念は？あれ？

「今日あんたを学校の友達に紹介しなきゃなんないの。協力してくれる？してくれるよね」

ぎりぎりと僕の頬に姉の指が食い込んでいく。以前のように肉が付いてない僕の頬の痛覚を実に効果的に責めつけている。

「何の為？痩せたのな・ん・の・た・め？」

「おねえひゃまに、はふぃをかかせまいひゃめれす」

「だよね。その本番が今日、今からなの。自覚してる？」

血走った目を隠そうともしない姉はすっかりヤンギレへとジョブチェンジを果たしていた。

足が浮くんじゃないかと心配になるくらい渾身の腕力でぎりぎりと頬を掴む姉。彼女の、元々短い導火線はもはやライフゼロ！

「もう一回聞くわよ？……趣味は？」

「……ぎゃｒ」

「ギャ！？なに！？聞こえない！！」

「映画鑑賞れす」

「最近見た映画は！？」

「マクロｓ」

「はぁあ！？」

「す、すたーとれッく。ＳＦれすＳＦ」

「……まあいいわ」

あれ？おかしいな？
これ……中学時代より過酷になってない？

レベルデザイン間違えてるよ神様。
いきなり無理ゲーじゃん？

5

少し学校からは離れた場所で姉と別れた僕はテクテクと彼方に見える校舎を目指す。
周りには民家以外ほとんど見当たらない。駅からもバス停からもいい具合の距離感を保つこの学校ははっきり言って不便だ。
偏差値の高さも手伝い僕のいた中学からこの高校に進学したのは二、三人だと聞いている。
公立の進学校であり制服も男子生徒は学ラン、女子は地味なブレザー。『質素は美徳』が校風のガリ勉ばかり集まる面白みのない高校。
なんせ文化祭や体育祭といったギャルゲー定番のイベントすらバッサリカットだというから学生に不人気ナンバー1との触れ込みも的を得た評価なんだろう。

……だがそれがいい。

まさに僕にとって理想的な学校だった。
『ひとりはみんなの為に』的な忌々しい作業が纏わり付く行事が全くと言っていい程ない。学生は勉強だけしてしてろ！細けえこたあいいんだよ！とがんじがらめの管理教育。私語のない授業。
ステキじゃん？

僕は別に頭がいい訳でも上昇志向が強いわけでもない。
そんな僕がこの学校に推薦で入学できたのは単純な理由が一個あるだけなのだ。

『勉強が出来る』んじゃなくて『勉強をする』から。
デブでオタクな僕の唯一の処世術。成績という明確な物差しは僕にとって『盾』であり『命綱』だっただけのハナシ。
陰湿で狡猾ないじめヒラエルキーは取り柄がある奴には矛先が向きにくいのだ。
当たり障りのない学校生活を送るために僕のような人種には能動的な努力が不可欠で、それがたまたま勉強だった。

だから予習、復習は欠かさないし決してそれを表に出さない。姉は単に成績が良かったんだろうが僕は違う。バカなりの努力が偶々うまくいった。そんだけ。

この学校のレベルに付いていく自信は全くないし、落ちこぼれたって構わない。
目指せぎりぎり卒業！このガチガチの学校で僕は人知れず息を潜めながら淡々と高校生活を過ごすのだ！

「……あの」

そんで訳の分からない大学にドサクサ紛れに滑り込み、行ったり行かなかったりしながらなんとなく中小企業に就職するのだ！

「あの……すいません」

結婚！？バカ言っちゃいかん！あんなものは情報弱者、……そう！情弱に任しとけばいいんだよ！ポコポコ子供生まれて養育費にヒーヒーあえぎながら目減りする人生を突きつけられてればいいんじゃないかな！だって僕の嫁は子供産まないもの！液晶というスィートホームで僕を待つ嫁は出産なにそれおいしいのだもの！

「あの！」

「ひっ！？」

びっくりした！びっくりした！

「あ、ごめんなさい。何度も声掛けたんですけど」

「……？」

「あ、……あの、ちょ」

ぐるんと振り返る僕。僕の後ろには用水路、そして田んぼ。案山子すら立っていなかった。しかし僕みたいなデブオタに女子高生が声掛けないよな。んなこたあ分かってる。こちとら何年モノだと思ってるんだナメヤガッテ。

「買いません」

「え？」

未だに姉以外に話しかけられると赤面してしまい、しかもメスとなると失語症まで併発する可能性大。しかし最近のキャッチは手が込んでるな。制服まで着込んでくるとは。

しかしあいにく僕はコスプレスキーでは無かった！はーっはっはっはっは！勝った！！

「絵なら買いません。は版画とかもま、間に合ってます」

僕は自分の革靴を凝視しながらきっぱりと宣言した。
……が、危ない！失語症が顔を覗かせている！

たたかう

↓逃げる

僕はくるりと踵を返し逃げ出した。

「ちょ！待って下さい！」

しかし回り込まれてしまった！

「なななななんなんですか！？そんなにノルマとかキツイんですか！？」

なんて職業意識の高いメスだ！若く見えるけど3人くらい子供育ててるのか？狙った獲物は逃がさない１３のゆかりの者なのか！？トップセールスを挙げるのはこんなにも必死な作業の繰り返しなのか！？

「なんの話してるんですか！？」

「スゴ腕セールスウーマンの日々……」

「全く意味が分かりません！それより早く見てください！ほら！」

謎のウーマンは僕の袖をぐいぐいひっぱり学校からは逆方向へと誘導する。背はかなり小さいが天パーなのかシロガネーゼなのか、ゆるくかかったウェーブの明るい髪にカバンにぶらさがった正体不明のストラップ。謎のウーマンは細部にまで女子高生を再現していた。このコスプレは見事と言うにヤブサカではない。こだわり気質は好ましい属性だと思うんだ。

「あそこ！あれです」

何の木かは知らないし知りたくもないのだが、小動物が枝の先に乗っかっているのだけは確認出来た。

「降りられないんだと思うんです！」

異論は無い。子猫には良くあることだと思うしそれ以上でもそれ以下でもない。

「早く！」

えっ！？

「お願いします！」

……いやいやいやいや。木登りなんて。よく相手見てモノ言うんだなお嬢ちゃん。

「普通にむ、無理。僕があそこまで？僕のこのバデーを見ても……」

「？」

キョトンとするウーマン。固まる僕。

そうだった。

僕の愛くるしいミート・サブマリン（イミフ）はクサレ３Ｄに奪われたんだった。

6

「すっかり懐かれちゃいましたね！」

最悪だ。最悪のスタートだ。

僕の初登校の風景は暗雲立ち込める見るも無残な大敗北となった。

いや、なっている。今も。

ニコニコと僕の横から付いて離れないウーマン。これはコスプレでは無く本物だと……同じ学校の生徒なのだと気付いた時には僕は完全に好奇の目に晒されていた。

新入生の癖に女連れで仲良く登校。僕の頭には偶ににゃあと奇声を発する小動物。感慨も何も無い、僕の背中はじっとりと汗でシャツが貼り付き赤面症は出っ放し。自意識過剰だとの自覚はずっとあるのだがやはり僕は極端に『他人の視線』が苦手なのだった。

「……で、どどうするんですか？」

ウーマンの目を見られない僕はうつむいたまま首の後ろを掻きながら問う。しっぽがあたってこそばゆい。

「うーん、どーしよっか。飼えない？」

おいおいおいおい。丸投げ？バシッと言ってやれ。この三次元の悪魔に誰が一番偉いのか分からせてやるのだ！！

「飼えない……とお、思う」

無理!!顔もまともに見られないんだよこのやろう!!オタなめんな!!

「そっか。ちょっとごめん」

えい、と軽々しい掛け声と共に僕の前方に駆け寄るとウーマンはいきなり抱きついてきた。

……抱きついてきた?

「□#$!&ｐ;ッ!!??」

「ちょっと!暴れちゃだめだよ!」

痴女!?リアル痴女!?どこにフラグあったの!?いつの間に踏んだ!?

唐突過ぎるだろ3次元!!脈絡の無い接近イベントはクソゲー扱いされても甘んじて評価を受けろよ!今回はお布施として諦めるけど今度また同じバグモドキのクソフラグたてやがったら……

「はい捕まえた!あたし職員室行って放課後までこの子預かってもらってくるね」

「積みゲー行きだこの……え?」

ウーマンは僕の頭の上の小動物を大事そうに抱え僕の目を見てニッコリ微笑んだ。不意打ちに噴出す汗。高まる鼓動。息苦しい。

「助けてくれてありがとね！」

「あ……あう」

僕の手のひらを一回握ったウーマンは満足そうに校門へと走り去っていった。

途端ギュウっと視界は開け周りの景色が鮮明に浮かび上がる。

思い出したよう酸素を取り込むと頭の中を洗濯機に放り込んだような新鮮な気分に浸った。

澄んだ音色は金属的な剛健さで僕の耳をくすぐる。そこかしこで息を切らせ走る生徒たち。被せる様に響く、おそらく教師たちであろう大人たちの叱咤。

そして僕はようやく気付く。

完全に入学式に遅刻したことに。

7

まだだ。

入学式でこっそり途中参加し見知らぬ有象無象に非難の視線をいくら浴びようと。

初対面の女子高生にくすくすされながら「猫は？猫」と半笑いで聞かれようと。

滝のように流れる僕の汗を見た養護教諭に保健室に連行されそうになったとしたって。

まだだ。

挽回できる。

僕はようやくたどり着いた教室の中、汗を拭いながら起死回生のザビ家も真っ青の澱んだ思考に頭まで浸かっていた。

中学時代に培った無機物化のスキルをいきなり全力で発動し誰の意識にも認識されないようになってやる。ここは僕が生きて行くうえで、ベストではなくてもベターではあるはずの学校なのだから。

「私が担任の福島です。皆さん一年間よろしくね」

初対面の教師はまだ若い、２０代後半くらいの女性だった。ジャージを着用していることから体育教師なのかと連想させるがそんなことは今の僕には驚く程興味が持てない。所詮有機体のメスだし……

やたらはきはきとしたその口調からも友好関係は望めない。

「はい！じゃあ順に名前呼んでいきますから呼ばれたらその場で自己紹介よろしく！」

僕は石。僕は煙。僕は空気。僕は……

「出席番号1番、新木くん！」

僕は虫。薄汚い蟻。

ん？……別にアリは薄汚くないよな。いかんいかん。無意識にM気質がデロンと漏れていた。これというのも3割位はあのクサレ3Dのせいだ。んで、1割は朝のセールスウーマン絡みのせいで受けた一連の辱めの為。

「新木くんは……」

はっっ！！じゃあ6割は僕の資質！？なあんだ、所詮醜い肉団子は避けられないカルマだったのか……って誰が肉団子だ！！加工食品呼ばわりは許さないんだからねっ！！

「新・木・周・蔵・くん！」

「体は剣で出来t……うわあっ！？」

眼前に迫る担任教師の顔。僕の毛穴からは壊れた蛇口のように一気に汗が噴出しプライベート危険信号がミーミー騒ぎ立てる。

「はいボーっとしない。呼ばれたら返事、のち起立」

ああ、また見られている。僕は一秒でも早くこの状況から逃れるためおとなしく席を立った。さっさとオワレ。お願いだからオワッテクダサイ。

「君が周蔵くんかあ。シューゾーって呼んでいい？」

「……？」

背中を伝う汗は靴下まで届こうかという勢いで垂れ流れちょっと眩暈がしてきた。呼び方なんてどうでもいいよ。名前なんて記号に過ぎないし、そもそもまともに呼ばれたことなんか無い。

「綺麗なお姉さんには先生随分助けてもらってるからねえ。あ、お姉さんに福島が担任だよって言っておいて」

クサレバイタの陣営のモノか！？ならばこの仕打ちにも頷ける。僕を粘着質に尋問し今朝の鬱憤を晴らしているんだろう。どこまであの３Ｄの権力が食い込んでいるのか知らないが自分の教室内であっても全く気が抜けないことだけは理解した。

「にしても……美男美女の姉弟かあ。いいね！花があるよねえ！」

ニホンゴ話せ。どんな皮肉だよ。って誰が肉団子だ！！って言われてなかった！！

「この学校に推薦入学って。シューゾーもやっぱり優秀なんだねえ。先生と仲良くしてね！」

教師の皮肉が斜め上過ぎて理解がおっつかないし。一体何が目的で

そんな妄言をノベテいるのか、オトナの話術の奥深さに戦慄をキンジエナイ。
想像以上に高く僕の前に建立されたリアルの壁。

僕はこれから始まるスクールライフという名の魑魅魍魎が巣食うバトルフィールドのど真ん中で、ただ立ち尽すことしか出来ないでいた。

8

「はい、じゃあ今日はここまで！」

ジャージ着用の担任教師の号令で一時解散となる。本格的な授業は明日から、今日は簡単な挨拶のみで各自明日に備えろ……そういう事みたいだ。

がたた、と一斉に椅子を引きずる音が教室中に立ちこめ僕は少しだけ眉間に皺を寄せた。

ジャブの刺し合いのようなおっかなびっくりの会話がソコラ中から聞こえてきてどうにも居心地がよろしくない。

あちこちの中学から上澄みだけをかき集めたようなこの学校は「友達がいるから私もその学校にいくー」なんてスィーツな思考の持ち主は皆無。大学へのトンネル、通過点だとの認識を持って入学してきた生徒がほとんどなのだ。

当然同じクラスに友人がいる者などかなりの少数派、よって出鼻のハラの探りあいは一層熾烈を極めている。

各々が今まで培った対人経験をフル活用させ、クラスでのより友好的な立ち位置を確保しようと男子生徒も女子生徒もぐるぐると大立ち回り。ご苦労様なことだ。

……。

……。

さあ回れ回れ！
その座席は限られてるぞ！もっと必死に喰らい付かないと隣の池面がゼーンブかっさらってくぞ！？
はーはっはっはっはっは！！見ろ！人がゴミのようだ！！

「参加しろ」

「おぶっ！？」

僕の視界が真っ白！？

「この社会不適合肉団子が。だからあんたは友達一人もいないのよ」

姉だ！なんたるフテブテシイ登場！
３年の分際で堂々と新入生の教室で我が物顔！どや顔！弟の一回も開いてない教科書での顔面殴打！
看守か！？お前は野生のカンシュなのか！？

「あら？どしたの古都ちゃん。弟くんのお迎え？」

新木古都。姉のフルネームだった。自宅では名前なんて呼ばないし呼びたくもないし『コト』なんておかしな名前とっくにボーキャクの宇宙（ソラ）に置き去りにしていたのでやたら新鮮だった。
ってか思い出させんなジャージ教師。

「フクちゃん！このクラス？」

宝物でも発見したかのようなウソクサイ笑顔でジャージに駆け寄るバイタ。迎え撃つはジャージーストライプ。どちらも会心の笑みでいざ騙し合え！さあ！肉を抉り骨を食むようなZ指定の罵り合いを展開するのだ！！良い子は真似スンナ！

「シューゾーちょっとおとなしいけどいい子だね」

「ただの小心者ですよ。面倒かけると思いますが」

ぺこりと頭を下げる姉。どんな効果を伴った攻撃かはまだ分からないがいずれあの姉のする事である。例えば頭を下げるという、一見無意味な行動こそがジャージーストライプの今後の子孫に致命的で陰湿な悪影響を……

「やめてよ。色男の世話ならこっちから頼みたい位なんだから。ぜーんぜん問題なし」

でーたー！！
一瞬で相手を煙に巻くジャージーストライプの秘奥技！『ニホンゴワカリマセン』だあ！！
痛烈で突拍子も無い、相手を不安の螺旋に叩き込む皮肉の刃！
姉はもう前だか後ろだかワカリマセン（乳的な意味でも）！！

「またフクちゃんは……でもまあよろしくお願いしますね。ほら周蔵、いくよ」

「へ？……どどこに？」

急に飛んできた矛先にまたしても汗を噴出させる僕。僕のかばんを

乱暴に寄越すと腕を掴んで歩き出す姉。っていうか名前呼ばれたの5年は前だったよなあ。

「私の友達が紹介してほしいんだって弟。忘れてた？」

「おぼ……覚えてる。から……」

木彫りのような、にこやかながらも無骨な笑顔を僕に向けつつ渾身の体重をのせ僕の足の甲をふんずける姉。ミシミシと嫌な音が僕の体内を通過していた。

「また明日ねシューゾー」

さわやかな笑顔を振りまき去っていくジャージ。

見送るクサレ。

耐える僕。

クラスの生徒たちの視線に気が付いた姉は愛想よく、隙無く、軽くいなした後
僕を牽引車のごとくロックをかまし、廊下へと突き進んでいった。

9

目的地へと邁進する姉に行き先を尋ねる勇気は僕には無い。
しかし、姉の脚はとっくに校門を出発しており……民家を潜り抜け歩道橋を渡り切りそれでも一言も無い姉の態度に幾ばくかの不信感が募る。

「どどこまで……行くの？」

多少の？みは勘弁していただきたい。

「駅前のカラオケ」

「か……」

死刑囚に死刑を言い渡す裁判官がその死刑囚の目を全く見ないなんてアリエールのか！？
今あんたがしてんのはまさにそういうコトだぞ姉よ！！せめて絶望に打ちひがれる哀れな弟の顔を見ろよ！！見てやれって！！

「天井知らずの音痴っぷりのあんたに歌えなんて言わないわよ」

ああ、ほっとした……じゃない！僕はあのカラオケＢＯＸという空間が大嫌いなのだ。歌手でもないのに自意識垂れ流しのあいつやこいつが密閉された個室で奏でる不快と退屈とちっちゃな自尊心の三重奏！！耐え難い！！耐えがたきは耐え難い！！

「一度顔見せすればみんな満足するんだから。面倒なコトはまとめて済ました方がいいでしょ？」

確かにこの姉が真実友人が多く、毎日入れ替わりで少人数づつ自己紹介を繰り返す事態を想像すると胃がちくちくしてくるのではあるが。

実に合理的。理にかなっている。姉らしい。

しかしホントに自信があるのなら僕の二の腕を掴んで離さないのはどうか？

「私らは受験生だからクラスの決起集会みたいなもんよ。で、あんたはおまけ。ついで。お寿司の緑色の食べらんないやつ」

それはバランと言うのだ姉よ。

「適当に相手したら帰っていいから。小一時間くらい我慢しなさい」

高校入学早々縦社会の壁にぶち当たる僕。そういうの無さそうだからこの高校を選んだはずなのに。

僕の誰にも届かない呟きを完全に黙殺した姉はカラオケ店のガラス製自動ドアをスライドさせる。迷いは一切感じられない。ハラを括った人間だけに許される迅速かつ沈着な所作。

泣きたくなった。

「あ、こっちだよ古都！」

たまたま出てきた女子高生に声を掛けられる姉。その扉から漏れ聞こえてくる、よく知らないロック調の音楽は相当のボリュームだった。

「あ、これ弟の周蔵。別に見たって面白くないでしょ？」

「きゃー！ウワサ聞いてる！やっぱカッコイイじゃん！」

たらり、ではなくボタボタ。

開き直った僕の毛穴は大開放中。僕はじっと自分の革靴を凝視しながら羊の数を数えていた。もう姉と女子高生が何を話しているのか全く聞こえない。聞こえるのは自分の鼓動のみだった。

「あんまりいじらないでよ？話下手なんだから」

羊が１３５匹、羊が１３６匹、執事が１３７人……って多っ！！コワっ！？

「無口な男子かー。いいねー。今時じゃない感じで！」

「そんないいもんじゃないのに」

我次郎が１５６人……我次郎？我次郎って誰？あれ？

10

たった15分。
この短時間で人はここまで消耗するのか。

薄暗い比較的大きなカラオケBOXの一室。招き入れられた僕と姉。
姉のトモダチらしき女子高生にあっという間に囲まれ逃げ道を消された僕は「アア」「うー」とか言いながら質問責めに合っていた。
言葉に溺れる、という稀有な体験を楽しむ余裕など無い。僕はただ汗をかき密やかなうなり声を漏らすのみ。
完全に不意を突かれたとはいえ情けないことこの上ないと心から思った。

「周蔵君は歌わないの？」

ずいと差し出される辞書みたいな分厚い本。これで選んで今歌えと？この僕に？

「いいいや……ぼぼぼ僕はその……」

スキャットマンか！？それとも放浪の切り絵師？？み過ぎだろ僕！！しかも喩え古過ぎ！！

「緊張しなくてもいいって！ほら、選ぶ選ぶ！」

肩を何人かに掴まれソファーに押し込まれる。そのとき誰かの足を踏んだ気がしたので反射的に振り向くと

「いてえ」

あぁ……なんで？

なんで進学校の優等生グループの中にＤＱＮがいるの！？この人種は深夜のコンビニ駐車場とか５０円で出来るゲーセンとかに生息してるんじゃないのか！？しかもリーゼントとかのオールドタイプじゃなくジーパン脱ぎかけるニュータイプ！！

よりタチが悪いニュアンスの方じゃないですか！！

「すすすいません……」

「スススイマセン？なんだおまえ、ちゃんとしゃべれ」

だらりと着崩れた制服の胸元をさらけ出し僕の鼻先に詰め寄るＤＱＮ。その迫力というか威圧感で僕は呼吸が苦しくなっていた。

「ごめん梶君、弟なんかした？」

「ああ、新木サンの……いやたいした事ねえよ」

姉が割って入ると場の空気が途端に柔らかいものに変わっていく。

この二人の関係は全く分からないがとにかく助かったようだ。

「ダメだよ新入生おどしたら。梶はただでさえ威圧感すごいんだから」

「そーだ！イケメンは正義なんだから！」

気軽に女子高生たちから罵声（？）を浴びせられるＤＱＮを見て少しだけ呼吸が楽になってきた。
意外と風貌に似合わず温和なＤＱＮなのかもしれない。

「わかったわかった。悪かったなイケメン君」

僕の頭にポンと大きな手のひらを乗せたＤＱＮは近くにいた姉と僕にしか聞こえない程度の小さな声で短く呟く。

「シンキクセーんだよ。さっさと失せろ」

ギリ、と掴まれる髪の毛。頭皮はぎゅうと上に持ち上げられ激痛に襲われる。
しかしその痛みも一瞬。フイとＤＱＮは背中を向けた。「イラつく面さらしてんじゃねーぞ」ときっちり捨て台詞も置いていく周到ぶり。
完璧だ！あんたの狙いはジャストミート！！
見てよこの僕の足！！ガタガタふるえて止まらないし！！ああビビッてるよ！！だってコエーし！！すぐさま退散するし！！
僕は背中に被さる女子高生の幾つかの声を勢いで振り切り、自由の広がる分厚い扉の向こう側へと転がり出た。

リアル恐るべし！！でゴザルの巻！！

11

「帰るの？」

壁に寄りかかるように……まるで負け試合の後のボクサーばりの脱力感をこれでもかと身にまとっている僕に対しての姉のこの発言はどうなのよ！？あんた聞こえてたろ！？

「かかか帰る！！もうしょしょしょ紹介は充分だろ！？」

いつもより沢山回しております！！呂律をたくさん！！
まだ体の強張りは取れていないので走り去ることは困難だが、這ってでも帰ってやる！！

「ちょっと機嫌悪かったんだよ。そんなヘンな奴じゃないよ梶君」

「けけ怪我したらどうするんだよ！！なんで僕がこんな目に合わなきゃならないんだ！？」

くだらない！全くくだらない！！こんなのが嫌だから僕はこういう場を全力で避けながら今まで生きてきたのに！
僕はそういうんじゃないんだよ！適材適所！！僕の『適所』は絶対ここじゃない！！今でもない！！

「そっか」

「そうだよ！」

姉はまだ動こうとはせず僕の足元をじっと見詰めている。
なんとなく去りにくい空気。居心地の悪い空間。
音楽は未だに鳴り止まず扉の隙間から溢れ出していた。

「わかった」

不意に跳ね上がる姉の顔。

「ありがとね来てくれて」

なんだよその顔。

「19時には帰るって父に言っといて」

お礼を言われる筋合いなんか……

「気を付けて帰りなよ」

……あ。

くるりと姉は体の向きを軽やかに反転させるとすたすた歩き出す。
その背中を見ながら僕はその場にペタンと腰を落とした。
他のお客さんも通る筈のカラオケBOXの通路。いやここが飛行機の滑走路だとしても僕はペタンと腰を落しただろう。

「……」

廊下の少しだけ開いた窓ガラスをボーっと眺める。

そうか。そういうことか。

僕が推薦決まったのは9月。姉がその事実を知ったのだっておんなじ時期。
嫌だったのは分かってる。あたりまえだ。僕が姉の立場だとしても同じ事を考える。
でもあの姉は「止めろ」とは一度も言わなかった。他の学校だってまだ受験は出来た。姉が本当に嫌ならそう勧めたはずで、僕が断らないであろう事も姉なら分かっていたはず。
確固たる動機があった訳じゃないんだ。僕だってそんな風に言われたら拒絶はしなかったと思う。

でも入学後の事しか姉は言わなかった。
毎朝自転車漕いでのランニング？体重管理？全部僕のためじゃないか。
好きの反対は嫌い？あー確かに姉は僕が嫌いなんだろう。そこは自信あるよ。でも。
好きの反対は無関心だ。姉は僕に無関心だった？うっとうしいほど干渉されたろう！嫌いではあるがチャンスをくれていたんじゃないか？

だから。

さっき振り返った姉は。

・・・

「おい君……こんなとこで」

完全に初対面。
通路を塞いでいた僕に注意を促そうと声を掛けてきたサラリーマンとスーツの女性に対し、僕は座ったままぐるりと向き直り合い対峙する態勢を取った。

「な、……なに」

訝しげな表情を僕に向けた女性。しかし元いじめられっこの僕はその手の視線は免疫付きまくりなので全く効かない。ええ効きません!!

「おおおお願いします!!」

ゴンッと鈍い音がして衝撃が後頭部までつきぬける!!眩暈もするし手足に微かな痺れも伝わってきた……しかし見事!!
誰が見ても惚れ惚れするような土下座!会心の土下座!THE DOGEZAだった!!

「お、おいどうしたんだ?やめt」

「その上着!!にににに2分だけでいいんです!!貸していたただけないでしょうか!?」

ぐーりぐーり額をプラスチック製の薄いタイルに擦り付ける僕。まだか!?まだたりないのか!?

ほーれぐーりぐーり。

「き、君！血が出てる！額から血が出てるって！！」

ヘタレオタの精一杯の意地。是非とも見ていただこうじゃあーりませんか！！

クサレ３Ｄめこのままじゃスマサンゾ！！

12

ぶぶぶ。おおお。

いやあ……ぶれるぶれる。

僕はカラオケの個室の扉に手を掛ける。ん？あり？開かない？

「……」

おお。間違えた。ＵＦＯキャッチャーのガラスケースだった。ケースの中に居るごむごむの海賊に向かって僕は軽く会釈をしてメガネを探す伝説の漫才師のごとくフラフラと徘徊する。「めがねめがね」と呟きながらも探してるのはメガネじゃなくてノブ。扉のノブはどこだ？

「ちょっと君……大丈夫かい？」

上着を貸してくれたグッド・ガイが僕をある程度の距離を保ちながら声を掛けてきた。仲間になりたそうにこちらを見ているわけでは無さそうなので僕は無言で親指を彼に向けて突き出すことで返事の代わりとする。

サムズアップ！！

サムズアップ！！

「ああ……じゃ僕は失礼するよ……事情は全く見当も付かないけど」

サムズアップ！！
さむずあっぷ！！！！

「わ、分かった分かった！……なんだか知らんが、頑張れよ」

なぜか激励の言葉を口にするグッド・ガイ。しかし僕はそのドン引きの激励を甘んじて受けよう。ありがとう！謎のグッド・ガイ！
僕は３重にブレル彼の背中を見送りながら感謝の意を込め一回だけお辞儀した。
額の傷が少しだけ自己主張していたがまあ問題ない。タオルもグッド・ガイにもらったので鉢巻き状に頭に巻いてあり、今の僕は１５パーセントだけランボーと化してるからね。い、痛くなんかないんだからねっ！！

僕は『ゴ』の付く台所の主のように壁伝いにズリズリと横移動する。めがねめがね……めがね？ノブ……そうだ。ノブノブ。
こつ、と左の手首に突起の感触。掴んでみるといやらしくヌルリと回転するじゃありませんか。
うへへへへ。上のノブでは嫌がってもこっちは正直なもんだなあノブさんよう。うへへへ。

僕は扉を思いっきりひっぱり中途半端なＢＧＭを掻き分けながら部屋の中へずい、と足を踏み入れる。

「あー！シューゾー帰ってきた！古都ー！シューゾーきたよ！」

女子高生は能天気な歓声を僕にぶつけるが、そんなオチも無い出口の見えなさそうな笑顔に付き合ってる暇は無い。

「ちょっとあんた……おでこ何したのよ。血が滲んでるじゃないの」

生徒たちを掻き分け僕に詰め寄るクサレ。
クサレの言葉にザワザワと他の生徒たちも僕の傷にトドメを刺さんと群がってくる。

「うわ。痛そう」

「これちゃんと消毒した？」

「わたしバンドエイド持ってる！」

偽りのいたわりを口の端の昇らせる女子高生たち。僕はそんな見え透いた懐柔策には踊らされないぞ。持ち上げて落すのはいじめの初歩だろ分かってんだよコノヤロウ。

「はいシューゾーくん、屈んで」

ひとりの女子高生が僕の正面に立ち塞がり傷口に手を伸ばす。
間抜けに流れ続けるＢＧＭ。
瞬間と瞬間の隙間。

「タオル取るよ？せっかくのイケメン台無しｄ」

ごぉが。うぃー。

「……」

ぺたりとしりもちを突く女子高生。何が起きたのか理解できていないように僕の顔を見上げている。キョトンとした表情。開かれた目。どうやら至近距離での僕の防犯カラーボールのようなゲップに恐れおののいているようだった。

「あんた……一体……」

僕の袖をグイ、と引き寄せ僕に肉迫するクサレ。喰らえ。

ごがぁ。

「ちょ！……あんたお酒飲んでるの！？」

むう。さすが姉。僕のカラーボールの効果が薄い。精神的ショックも受け付けていないようだ。

「僕はいじめられっこでしたっ！！」

「ば！なに言ってんのよ！？」

「空気が読めない！ノリ悪い！気持ち悪い！１１５キロもあれば鼻息だって荒くもなるし、コロッケだって１０個は食べられる！」

「やめろっつってんでしょうがこの肉団子！！あんた私のイメージ粉砕する気！？」

シンと静まり返るボックス内。僕と姉だけがもみ合い絡まりあっている不思議空間。

「いじめの力学は縦横無尽に教室内を走っているのです！ちょっとだけバランスが崩れてたりちょっとだけ異質だったりするポイントが大好物！！姉だってこの後ろだか前だか分からない胸でいつ標的になってもおかしくなかった！！」

「てんめえっ！！いくら弟でも言ったらダメなことってあるんだぞっ！？身もふたも無いじゃないよっ！！こちとらウッスラ自覚はあったんだから！！」

うっすらなのかずーずーしい。

僕は姉から視線をずらし名前も知らない女子高生にロックする。

「誰をよぶ？」

「え……え？」

姉は僕の背中にしがみつきありったけの暴言を僕に投げかけているようだが僕は姉をロックしていないので居ないのと同じだ。デビルメイクライの法則より。

「誰をよぶ？」

「だれって……え？」

「だから！！」

なんでわかんないかな！？これだから３Ｄオンナは苦手だよ。察しが悪い！悪すぎる！

「あなたが理不尽な力の矛先を向けられ！唐突な嫌がらせを日常的にリピートされ！！誰にも言えない相談できないそんなとき！！ヤツを呼ぶでしょう！！」

「？？？？？」

なんならもう僕が恐怖の対象にしか見えてないんじゃないだろうかこの女子高生。んーしょうがない。わからないってのは別に悪ではないからなあ。彼女を啓蒙するのも僕の役目なのかも。

「ベクトルマーン」

「え？」

「ベクトルマーン、はい言って」

「べ、べくとるまん？？」

「そうだ！！」

「きゃっ！！」

僕は人差し指を彼女の鼻の頭に押し付け啓蒙を開始する。恐れおののいたこの顔を眩しい笑顔に変えるその日まで！！

「どうにもならなくなったとき。誰にも頼れないまさにその時！どうすんのどうすんの！！困るよねこまったよねえー！！そこでベクトルマンですよ！！全ての理不尽な力学を自分勝手に粉砕する！そう！ヤツの名はベクトルマン！！」

シネマ・ハスラーと言いそうになったのは内緒だ。

「『タスケテー。ベクトルマーン』だ！！言って、はい！！」

「た、助けてえ。べくとるまん……」

僕はひょい、と軽くその場でジャンプする。ゆっくり流れる時間の一部でおろかな女子高生はただ僕をあほうのように眺めるだけ。だがそれでいい。いまはそれでいい。

そして僕はゆっくりと着地した後、勝ち誇ったようにこう宣言するんだ。

「はいベクトルマンきました。なんか用？」

姉

最悪だ。

「ベクトルマーン!!たすけてー!!」

「とーうっ!!」

皆ノリノリである。ベクトルマン（？）に変身を遂げたバカヤロウの姉であるところの私こと新木古都は暴走肉団子のランチキ騒ぎをただただ呆然と見詰めていた。

「さあ悩みを吐き出すのだ!!悩める子羊の胸倉つかんで、このベクトルマンが即解決!!泣こうが喚こうが即解決してやるぞーっ!!」

「カッケー!!カッケーよベクトルマン!!」

煽るな。煽らないでお願いだから。

「ベクトルマン!!私彼氏が欲しいんです!!どうしたらいいですか!?」

一人の女子生徒がバカの前に躍り出た。ノリが良過ぎるのは私のクラスのいい面でもあり悪い面でもある。

今は間違いなく悪い面が出てるんだけどね。

私は頭を抱えひとりソファーに沈み込んだ。

指を突き出し赤面症なのか酔っ払いなのか分からない顔色で女子生徒を睨み付けるバカ。

「ドンキで買え！！」

「即解決！？ベクトルマンスゲー！！」

彼氏販売してないから。解決してないから。

「さあ次はどいつだ！？薄毛ならリーブ２１！！整形なら高須院長！！それ以外の悩みならこのベクトルマンが一刀両断してやるぞ！！」

なんだ、解決する気ないのか。ってバカ。両断するな。

訳の分からない盛り上がりのカラオケＢＯＸ内。まっすぐ私に接近してくる男子生徒の影が視界の端に映りこんだ。

「新木サンの弟は……アタマおかしいのか？」

私の隣まで移動してきた梶くんはなぜかにやにやと笑顔を浮かべながら私の顔を覗きこむ。

「おかしいんでしょうね見たら分かるでしょ？」

「かっかっか！！間違いない！！ありゃキチガイだ！！」

梶君がこんな風に笑ったところは初めてみた。

コワモテで無口。ウワサでは女子大生やＯＬをとっかえひっかえ遊んでる、ウチの学校始まって以来の問題児らしいが。

特に私たちになにかするわけでもないので別に嫌われてはいないが、結構シャレにならないウワサもまことしやかに囁かれている。

「まったく……姉の立場も少しは考えろってんのよ。弟がアレじゃ恥ずかしくて明日から学校行けないじゃない」

「そうか？俺は楽しいぜ、新木サンの意外な一面も見れたし」

確かに大声をあげての醜態をさらす、なんて今までの私の学校生活には入り込む隙間さえなかった。てか、そんなものあってたまるか。

「それに、新木サンの事考えてない訳でもないみたいだぜ？ホラ」

梶君はあごで私の視線をバカの方向に促す。ずっと目を背けていたのになあ……なんであんな醜悪な肉団子を

「よく見てみろ。足震えてるだろ？」

「……」

飛んだり跳ねたり……せわしなく動かしてはいるが、動きの止まった短い瞬間確かに周蔵の脚は小刻みに震えている。注意深く観察しなくちゃ分からない程の暴走肉団子の悲鳴だった。

赤面症、失語症、対人恐怖症。私にはよく理解できない見えない荷物。

「あいつが話すの苦手なのはすぐ分かったよ、どもりまくりだったしな」

「……」

「頑張ってんじゃねえの？やり方は完全に阿呆だがな」

俺もガンバロ、そういって梶君は静かにカラオケＢＯＸから出て行った。大盛り上がりの喧騒の中、私は弟の震える足を見詰める。

私は周蔵のためにあれこれ世話を焼いていた。もちろんそれは嘘じゃない、嘘じゃないんだけど……

醜い弟が嫌だった、その感情のほうが確かに強かった。素材は絶対に悪くないのに、痩せるだけでそれだけで周囲の評価は全く違ったモノになるのに。

想像を遥かに超えるイケメンに変身したのはさすがに私も驚いたし嬉しかったりもしたんだけど。

そんなことじゃ赤面症とか対人恐怖症は治んないよね。

「ベクトルマーン！！」

「とーうっ！！」

だから

ちょっと、ごめん。

13

寝返りを打つ。そんな些細な事がこれほど困難な事だったとは。

「……」

自宅のベッドでの目覚めのひととき。これほど甘美で贅沢な時間を僕は楽しむどころか精神的苦痛と肉体的頭痛によって大量の汗をかいていた。もぞもぞと体をずらす拍子にふと禍々しい昨日の夢の映像が顔を出す。

タスケテー

「うあああああああああっ！！？？」

ふとんを握り締めた僕の手のひらには大量の汗。それを力任せにふり回しぐるぐるとふとんにくるまる。幻聴だ幻聴だ何も聞こえないなにも僕はしていない。

あああれは僕じゃない！僕じゃないんだ！ぼんやりとした昨日の夢。カラオケＢＯＸでの忌まわしすぎる風景。悪夢にしたってタチが悪いよ！！そんなバカなことって！！

ししし深呼吸！！酸素酸素！！

「……」

僕の細胞のひとつひとつに少しずつ酸素が行き渡るのをゆっくりと

噛み締めながら、僕は静かにまぶたを下ろしていく。
そして訪れる静寂。平穏。まだ汗は若干噴出しているがなんとか理性を戻していく。

そうだよ。

夢？夢オチ？

ギャルゲーなら不買運動に発展しかねない禁断の秘儀『夢オチ』。
まさかそんな手垢にまみれた恥ずかしい手法がリアルで体感出来るなんて、世の中はやはり何が起こるか分からない。
しかしそうと分かれば何を恐れることがあろうか？所詮は夢。脳が作り出した儚い幻影に過ぎない。
いくらリアルだとはいえ夢は夢！！誰にも罪は無く、当然僕にも罪があろうはずｇ

「ベクトルマーン」

「うあああああああああああああっっ！！？？」

「早くおきなよ。遅刻するよべ・ク・ト・ル・マ・ン？」

姉！？
なぜクサレ３Ｄが僕の枕元で僕の顔を見ながら頬杖をついているのか！？それになんだ！？お前の食欲を奪うのが目的だ、とでも言わんばかりのにこにこヅラは！？気持ち悪い！！
いや、ちがう！そんなことじゃない！問題は……なぜこいつが僕の悪夢を知っている！！？？

「みんなに会ったらお礼言うのよ？酔っ払って倒れたあんた皆して家まで運んでくれたんだから」

何を世迷いごとをノベているんだこのメスブタめ！！どんな能力を行使して夢の内容を知ったのか知らないがそれは僕の夢だ！！大体僕があんなアタマの悪そうなノリだけの言動で立ち回るはずがないじゃないか！？
全く冗談じゃない！！

「んじゃ私先行くからねー」

跳ねるようなステップで僕の部屋から出て行く姉。にしても。
語尾を延ばすな気色悪い！拾い食いでもしたんじゃないのかリバーシブルオンナめ！（当然乳的な比喩だ！）

僕は気だるい体調に違和感を感じながらも制服に袖を通す。
僕は何もしてないんだから学校行かない理由はないからね。な、ないんだからねっ！

……。

……。

……。

みろ。

それみろ。

電車に乗って学校近くの駅で降り、改札を抜けて民家の並ぶ中を縫うように歩く。
歩道橋を渡り、たまに謎の頭痛の為にアタマを抱えながらも僕を待ち受けるのは単なる日常でしかない。
彼方にではあるが学校も見えてきた。大丈夫、順風満帆ヨーソロー。
誰にも気付かれずただそこに在る。そんなカツオだしのような学校生活が僕を待っている。そんな理想の実現の為今日も僕は無機質化のスキルをありったけのマジックポイントで

「おっはよ！」

「ぅあああああっ！！」

なんだよ！？今日は驚いてばっかりかよ！！イキナリ肩叩くなんて傷害罪で告訴してやるからな！！

「そんな驚かなくてもいいじゃん？」

「あ……せせせセールスの……」

「だから違うってば！自己紹介もしてなかったからしょうがないけど」

目の前のセールス・ウーマンは９０度近く腰を曲げきっちりと僕に向かって頭を下げた。

「楠　理子。リコでいいよ！」

おおう。見たことある。

ギャルゲーでこんなの見たことある。礼には礼。挨拶には挨拶で答えねばなるまい。ここはひとつクールに決めておこう。

「あららららきシューゾーです」

無理だった。

「あららきくん？難しい名前だね」

しかも聞き取れなかったようだ。

「シューゾーくん、でいい？」

「……も問題ない」

僕らはもうまじかに迫っていた学校を見上げる。古ぼけた……見るからに堅苦しそうな建造物。

学校に吸い込まれていくように消えていく大勢の生徒たちの中、クスノキリコは憂鬱そうにため息を吐いた。

「シューゾーくんはトモダチ出来た？」

「……？」

コノ学校に来るような生徒はトモダチなんぞ二の次、あくまで副産物程度の認識しか持ってないだろうと思っていたが、クスノキリコの少しだけ縋るような目を見て「そうでもない生徒もいるんだな」とヘンに納得する。あんなものは居てもいなくてもどうってコトない僕からしたらちょっと新鮮な感情だった。

「私のクラスみんなおとなしい感じでさ。みんな『他人なんか知らない』みたいにしてるの。なんだか私浮いちゃって」

うおおおっ！！
クラス交換してくれえええっ！！

「私もっと高校って楽しそうなイメージあったから……なんか憂鬱」

そうだ！やっと分かったのか！？
人生なんて所詮消化試合みたいなもんなんだよ！！いくらトモダチトモダチ叫んだところで卒業すれば忘れるし、たまに会っても自慢話くらいしかしないんだから！
人間はひとりなんだよ！！せめて死に場所選ぶ自由だけを心に定め、あとはひたすら孤独なハイウェイをデカイバイクで直進するだけなのだああ！！うはははははは！！

『たすけてーっっ！！！！！』

「きゃっ！……なになに！？」

飛び上がるように周りを見回すクスノキリコ。合唱部の朝錬のような大合唱に僕の毛穴は瞬間沸騰。あれは夢のはずだろ！？ちょっとタイム！！まった！！ブレイクう！！

「？……3年生のクラスみたいだけど、なに大声出してるんだろう？」

「さささささあ？」

三階の教室のベランダから手すりに掛けた洗濯物のようにわらわらと騒がしい人だかり。こちらを指差す者もいればブンブン腕を振る者も居る。

『ベクトルマーンっ！！！！』

3階という高所から畳がぶつかってきたような声のビッグウェーブに途端込み上げる吐き気、寒気。それに……記憶！！

「なんだろ？こっちの方見てるみたいだけど？」

事情が全く分からないクスノキリコはにこにこと3回の教室に手を振っている。皇族かおまえは！？

「なんか分かんないけど楽しそう……ってどこいくのシューゾーくん！？」

「かかかか帰る！」

僕の腕に掴まったクスノキリコを引きずったまま僕は一刻も早く戦略的転進を敢行する！一部の迷いも許されない切迫した一大事なのだ！！

「授業はどうするのっ？シューゾーくんっってば！！」

「かかかか関係ない！さぼる！」

転進なんだからね！？後退じゃないんだからねっ！？

「おいおい……サボりは見逃せねえな」

「ぐはっ！？」

ぬるりと突然出現した腕に僕の首は締め上げられる。それはがっちりと僕の行動をキャンセルしずるずると校舎方向に引きずられた。

「ほい、仲良く登校中」

ぐい、となんとか視界を確保し暴漢のツラを目に焼き付けてやろうと必死に首を回す。

「あ……あんた……」

カラオケのＤＱＮ！！？？最悪だ！！なんでこいつがここに！？ていうかなんで僕に危害を！？一体何が目的なんだよこの暴力男は！？

「ようベクトルマン！いい朝だな！」

ふざけんなよ！！締め上げられて『そうですね』って僕が返事するとでも！？なにニヤけてんだコノヤロウ！！

「あ……あの！」

「ん？」

ＤＱＮに立ちふさがるはクスノキリコ！！いいぞ淋しがり屋！！お前のイジイジなネガティブパワーで僕を早く助けてくれ！！期待度ＭＡＸクスノキリコ！！

「なんだあんた？こいつのツレか？まさかもうオンナ作ってンじゃねえだろうなてめえ」

「ぐ……ちち違い……」

なんでこっちの被害が増大するんだよ！？こいつの腕は万力で出来てんのか！？ちょっとはバファリンいれとけよ！！

「と……友達です！乱暴は止めてください！」

そんな覚えはねええっ！！

「奇遇だな。俺もなんだよ」

あほかあああああっ！！てめえの友達は鉄アレイだけだ！！

「ってことはだ。お嬢さんとおれも友達だな」

「え？」

「友達の友達は……友達だろ？」

「そうなりますね」

ならねえよっ！！！！なってたまるか！！キラキラ目を輝かせてないで助けてくれよクスノキリコ！！淋しがりにも限度ってあると思うんだ僕！！

「俺、梶雄介3年、よろしく。あんたは？」

「1年の楠理子です！よろしくお願いします！」

よろしくすんなよろしくすんなってば。
なんかもう意識が朦朧としてきたぞ。

『ベクトルマーン！！』

「おい呼んでるぜ？」

知るか！！ってかあんたが首絞めてて呼吸さえいっぱいいっぱいなんだよ！！

「べくとるまん？ってなんなんです？」

君の無邪気さと人恋しさは痛いほど伝わったよクスノキリコ。せいぜい誘拐されないように、知らない人にはついて行かない様にすればいいんじゃないかな。

「困ったときは呼ぶんだよ。理子もな」

「困った時ですか？」

「ああ。きっとなんか変わるから。覚えとけ」

「はい！覚えておきますね！」

仲ムツマジイんですね。僕の存在はもう端っこなんでしょう分かります。

『タスケテー！！ベクトルマーン！！』

あー！！うるさいうるさい！！
僕のスネークバリの隠匿学校生活。
見るも無残なスタートを切る。
でゴザルの巻。

14

午前中の授業をこなししばし呆然とする僕。
理解は二の次、ものすごいスピードで黒板に書かれていく文字や数式をただただ書き写していくだけの作業。教師たちは僕ら生徒の理解の度合いを確かめながら授業を進める、なんて無駄は全くする気が無い様でさっさと教科書をめくっていく。和やかさなど微塵も無いコミュニケートなど不必要。
カタナ鍛冶のように「技術は盗んで覚えやがれ、このペーペーが！」的なオーラをどの教師も満遍なく醸し出していた。

……。

いやあ、快適！悠々空間！

和気藹々と進む授業なんかマッピラな僕は理解出来たかどうかはさておき、その突き放された授業内容にとりあえず満足していた。知識を詰め込むだけ詰め込み、後は内容を生かすも殺すも個々人の努力しだい。知識を消化し続ける自信は全く無いがそのクールなスタイルには大いに共感を覚えた。

「なんだよコノ授業……コピー機になった気分だよ」

僕の前に座っていた男子生徒ががっくり肩を落す。まあ、気持ちは分からなくもない。僕のようにハナから底辺すれすれの泥仕合を覚悟していなければ絶望感にも浸るというものだ。それほど圧倒的な知識の物量攻勢だったからなあ。

「そう思わない新木君？」

「へっ！？」

いつの間にか振り向いていた男子生徒は僕の顔を覗きこみ苦笑いを浮かべている。

いかにも優等生、縁の無いシンプルなメガネをかけ屈託のない物腰。

よく通る声。それに随分と整った顔立ち。

リア充臭が半端じゃない。よってこいつは敵味方で分類すれば間違いなく敵である。

「ああ！でも新木君はお姉さんに教えてもらえばいいのか！あんな美人の家庭教師がいるんなら新木君の余裕の態度も納得だ」

さて。

そんなにいっぺんにボケ倒されてもツッコミ切れないぜ坊主。

まずオネエサンは美人じゃないし、何か教えを請うつもりもさらさらない。そして、僕には余裕など皆無！分かったらその爽やかな笑顔をやめねーかこのリア充がああ！！

「なになに？なんのハナシ？」

横の席から唐突に掛けられた明るい声。その声の主はニコニコと笑みを浮かべながら僕とリア充の様子を伺っている。

「新木君はうらやましいって話。智花ちゃんもそう思わない？」

「あー、そうかも！イケメンはいいよねー。で推薦組でしょ？隙ナシって感じ。でも藤崎君だって結構イイ線いってると思うよ」

「はいはい。気を使わせて悪いね」

「どういたしまして」

僕が陶器のタヌキのように存在感を消している間、僕の目の前で応酬される言葉のピンポンだま。知らない固有名詞が気軽に飛び交う異空間。一体いつの間に己の個人情報を交換し合っていたのか、「藤崎」と呼ばれたリア充と「智花」と呼ばれた女子生徒は実にナチュラルに会話を楽しんでいた。

……。居心地悪い。落ち着かない。

なんだろう？このいけ好かない感じ？

「新木君はお弁当？」

誰が作るっていうんだよ！？……しかし僕の家庭環境など知る由も無いこの女生徒にいきなりブチ切れるほど僕も小さな男じゃない。

「てて適当に……パンでも」

「お姉さんに頼めばいいのに。そしたら僕にもお裾分けよろしく」

だからコイツは何がそんなに嬉しいんだよ！？いちいち爽やかな空気振りまいてんじゃねえ！！

「あー！わたしもわたしも！」

調子に乗ってんじゃねえぞ女子生徒！！てめえなんざ名前が僕の嫁

の『智花』と一緒じゃなけりゃ顔写真に『わたし寂しいの★』ってキャプション貼ってネットにばら撒いてやるとこだ！エロ親父の鼻息で毎朝目覚めやがれ！！

「シューゾーくーん！お昼買いにいこー！」

ガラガラと扉が開いたかと思うと同時、小学生のようなテンションで片手をピンと伸ばしちっさい女の子が僕に向かってきた。

「？新木君の知り合いかい？」

「あー、さすがなんだー？」

にやにやし・て・ん・じゃ・ね・え！！てめえらリア充と一緒にすんな！！

「シューゾーくんの友達の楠理子です！シューゾーくんがいつもお世話になってます！！」

友達大好きクスノキリコは元気にニッコリと笑って挨拶する。

「あ、藤崎です。よろしく理子ちゃん」

「きゃーちっちゃい！カワイー！わたし智花！！」

余程理子はうれしいのか二人の手を握ったままブンブン振り回し握手のつもりで興奮していた。なんつーか捨て犬みたいだよな理子って。

「理子ー。周蔵いたか？」

ぬぼっと立ち昇る不穏な陽炎が教室内を嘗め回すように観察する。
一瞬にしてクラスの雰囲気の硬度が増したような気がした。

「あ！梶せんぱーい！！こっちこっち！」

ぴょんぴょん跳ねる理子を尻目にひそひそと僕に声を掛けるリア充。

「あの人も……新木君の知り合いかい？理子ちゃんとギャップがありすぎるような……」

……。

う。

うはははははははっ！！そうだその顔だ！！その絶望を湛えた目、ビビッて引きつった歪な笑顔！！
はじめてＤＱＮが役にたったぞー！！あいつにはあとで褒美に窓枠のホコリを進呈しようじゃないか！！

「ほんものだー。はじめて見た」

「え？智花ちゃん知ってるのかい？」

「うん、割と有名人だよあのひと。雑誌のモデルとかのバイトしてるし」

「へー！ワイルド系ってことかあ。すごい人と友達なんだね新木君」

……。

万力ゴリラの褒美は取り消し！！アフリカに送り返せ！！全くなん

の役にも立ちゃしねえなあのＤＱＮ！！

15

「なんの罰ゲームなんだよそれは？」

春の陽気に煽られた万力ゴリラの提案で、僕らは四方を校舎に囲まれた中庭で芝生の上にペタンと座り昼食を取ることになった。各々購入したパンやら惣菜やらを自分勝手に頬張るが、僕にひとつ問題が浮上。

「そんなにおんなじ物ばっかり食べるの？」

「……」

訝しげな表情をアカラサマに僕に向ける理子とＤＱＮ。まあそれはそうだろう。ギトギトのカレーパンばかり５個。そして１個と半分を消化した時点で止まる僕の手。ついクセでほとんど無意識。久しぶりに見た油でテラテラ怪しい光を放つカレーパン、買わない理由があのときの僕には思いつかなかったのだ。

「さすが元デブ。買ったはいいが昔みたいにはいかねえってか？」

吐き気がする。イヤまじで。

「デブ？誰がですか？」

小さなスナックパンをもふもふ頬袋に詰め込んでいた理子がその作業の休憩がてらＤＱＮに問いかけた。

「周蔵だよ。こいつの姉貴から聞いたんだが１００キロ越えてたんだってよコイツ。１７０そこそこしかねえくせに」

「またー。冗談ですよね？だって今のシューゾーくんに私の体重言う勇気無いですもん。勝っちゃいそうで」

「いや、マジらしい。俺もびっくりしたよ」

姉は……まあ僕のコトは秘密にしておきたかったんだろうが、カラオケの一件で自ら暴露した僕には特に隠す理由も見当たらない。わずかなコンプレックスは持っていたがそもそも僕のフォルムが円形だろうが線形だろうが気にするヤツなんかいないんだから。

しかし、そんなことより……

「梶ー！ピクニック？」

「今度わたしも参加するー！」

「そのちっちゃい子紹介しろー！」

さらし者である。主に3年生の生徒から中庭の僕たちに浴びせられるヤジ。うすうす感ずいてはいたのだが、この中庭で食事をする生徒なんかいないんじゃないか？それどころかほとんどの生徒は教室で昼食を取るのがこの学校の通例のような気がするぞ。

適当に受け流し気にも留めないＤＱＮ。目立つ行為は避けたかった僕はまだ春だというのに汗をポタポタ垂らしていた。

理子はもふもふと頬張りながらパックのジュースをチューチュー吸っていて、周りの視線などあまり気にして無い。小動物の食事はいつも全力投球なのだ。一心不乱にワンツーワンツー。

「めずらしいじゃんカジ……あんたが誰かと仲良く食事とか」

一階の廊下の窓に寄りかかり気だるそうにＤＱＮに話しかける３年生と思わしき女生徒。顔には多分に意図的な装飾が施され他人の目を常に意識していることがありありと窺える。

「ワリー理子！牛乳買ってきてくんねえか？」

「もふ？いいれふよ！」

ＤＱＮは自分のくたびれた財布から１０００円札を理子に手渡す。

「お前も自分の好きなヤツ買っていいからな！」

「ふぁーい！ゴチでーふ！」

ひらひら１０００円札を振り回す理子の走り去る姿からは電子的な効果音が聞こえてくるようだった。タラちゃん的なアレだ。

「やさしーんだ」

「なんだようっせーな。失せろ」

友好的とは程遠いＤＱＮと一階の女子生徒。むしろＤＱＮの方がイラついているように見える。

……。

うごけねえー！！なになにこの緊迫感！結界！？結界の中にいるの

僕！？
たたたた退散しなくちゃ今すぐに！！

「そいつは？あんたイケメン好きだったっけ？」

「てめえらとツルムよりゃこいつらとメシ食った方がうまいんで。いいから失せろ」

なに？

なにこの間？
なんだかあのねえちゃん物凄く睨んでんぞおい！ちゃんと責任取れるんだろうなこのＤＱＮヤロウ！！いや、責任取ってくださいお願いします。

「じゃ……またねーカジ」

「けっ」

ふわりと優雅に立ち去る自意識過剰気味の女子生徒は去り際まで僕を睨んでいた。その証拠に僕の背中はプールの滑り台のように汗が絶え間なく流れていたのだ。

「ひひひとつ、聞きいてもいいかな？」

「おう」

「理子を……ぎゅ牛乳買いに、いいいかせたのって」

「おう、やっぱ気付いたか。あいつにまで危害が及んだら困るから

な。標的はお前にしといた」

ななななななんだよ標的って!!??わけわかんねえっ!!いったいなにを言ってるんだこいつは!!??

「お前だって見当付いてただろ?まあそんな急にはこねえから心配すんなって!」

来ない?なにが来ないの!?急にはってコトはそのうち来るの!?何が!?何が来るのっ!!バイオレンス臭立ち込めてんぞ万力ゴリラ!!

「面白くなりそうだなあおい!」

かっかっか、と高笑いするＤＱＮ。僕は足元の余ったカレーパンを眺めた瞬間吐きそうになった。

16

放課後……理子とＤＱＮと共に駅までテクテクと下校し（激しい違和感に襲われたのは言うまでもないが）自宅マンションに到着した僕は小ぶりなダンボールに嬉々として対峙していた。

そう。僕の日常はまさにこういうことなのだ。

リア充とおっかなびっくり対話？

隣の席の女生徒とおしゃべり？

迫力満点の自意識だだ漏れ上級生に睨まれつつの食事？

バカ言っちゃいかん！！そんなものはヒ・ニチジョーだ！！そんなものが僕の生活の中に割り込んでくるなんて全くおぞましい！！あほらしい！！

僕はぴりぴりとダンボールに貼られた厳重なガムテープを剥がす。

ｗｋｔｋ。

いでよ第２世代インテルＣｏｒｅｉ７　２６００Ｋ！！４コア８スレッドの神々しい勇姿をいざ白日の下にさらけ出すのだー！！

「……ぉおおおお」

クール！！ソークール！！

なんで人はこの青いロゴに惹かれてやまないのか！！控えめなデザインに隠された野蛮とも言えるパフォーマンス！！

ＤＤＲ３トリプルチャネル！！（マザーは交換済みだ！）当然のようにターボモードも搭載！！

Ｃｏｒｅ　ｉ７－９８０Ｘの６コア選択も考慮したがまだ様子見！！高いからね！！いまはこの選択がベスト！！性能的にも申し分はない！！さようならコア２ＤＵＯ！！長らくしつこくお世話になりました！！お疲れ様でした！！

「なに買ったの？嬉しそうにして」

移植換装は少々手間もかかるがそれもまたタノシ。サブＰＣの鈍重なノートでも引っ張り出しじっくり進めるとしようじゃありませんか。あ、最近はメモリも値崩れしてきたし、このさいバルクで構わないからいっそのこと４Ｇｘ３で万全の態勢を

「おーい、周蔵ってば」

「……」

なぜか最近の姉は僕の部屋にいることが多くなっている。一体何を企んでるのかは知らないが不気味で不吉だ。

「そういやあんたお昼中庭いたよね？梶君と可愛らしい女の子と一緒に」

「そそそれが……なんだよ」

「彼女できたらちゃんと紹介すんのよ？私もみてみたいしねー」

「……」

開いた口が塞がらない、という体験を今初めてしている。一体今日のの姉はどうしてしまったんだろうか？夕食前には僕のあまり広く

も無い部屋で雑誌を持ち込み寝転がり、夕食後には僕の部屋で教科書を何冊か持参して眺めていた。

そんな姉の挙動不審な態度を恐る恐る眺めていると不意に立ち上がった姉が僕の方を見てこう言い放った。

「なんか飲む？」

ナンカノム？

「私コーヒー入れてくるから。あんた何がいい？」

ナニガイイ？

「コーヒーでいっか。持ってくるから待ってて」

マッテテ！！？？

すいと軽やかに消えていく姉をホーゼンと見送る僕。何が起ころうとしているのか、いやもうすでに起こっているのか。

「……」

これはチャンス。

姉が部屋から出て行った今、ここしかない！

誰も僕の部屋になんか今まで入ってこようとしなかったから存在さえおぼろげだった『アイツ』の出番なんじゃないか！？

多感な高校生には必要不可欠！！砂漠にラクダ、ロシアに暗殺、メイドにご主人様がいるように！！現代高校生にはこれがあるじゃな

いか！！プライベートの絶対守護者、その名もルーム・キー！！
方針が決まれば即実行！！僕は机の引き出しから古いメモリや使わなくなったマウスを掻き分け絶対守護者を手にした。
そして地雷除去の慎重さで自室の扉に接近。

「……」

オール・グリーン。全ては順調に推移している。あとはこのｋ

「あんた……カギかけたらどうなるか考えての行動なんでしょうね」

「ひいいいいいいいいいっ！！」

エマージェンシーエマージェンシー！！板一枚挟んで交戦中！！いや、撤退は軍法会議で裁かれるぞ！！ここは玉砕覚悟の徹底抗戦しか

「あけなさい」

「少々おまちを」

音も無く開かれていくドア。姉の手にはトレーに乗ったコーヒーが二つ。

「おまたせー」

「……」

僕は小刻みな体の震えを必死に抑えながら、教科書を優雅に眺める姉の横で黒い液体をすすった。

17

ずるずる、ずるずる。
ずるずる、ずるずる、ずるずる、ずるずる、ずるずる、ずるずる。

「……」

異様。異質。胃痛。
姉の意図が全く理解できない。人間は『分からない』『理解できない』モノは取り合えず排斥するのが人類の歴史とハリウッドの伝統なのだが……あいにく僕はマッチョマンでもタフガイでもない。よってなんら対抗手段は浮かばない。お手上げ、白旗、テン・カウント。
んが！せめて死ぬときは前のめり！せめてこの姉の奇行の訳くらいは知りたいわけで。

「あああの……」

「私寝るときブラしないけど欲情したら警察つきだすよ」

「……」

そう言い放った姉は自室から僕の部屋までずるずる運んできた布団にさっさと潜り込む。しかし前だか後ろだか分からない粗末なぼでーの分際で『欲情』とは……姉であることを差し引いても充分痛々しい。

「って、なななんのつもりだよ！どどどうしたんだよ！」

姉に自覚と精神鑑定を促すのはまたの機会に！今は差し迫ったこの状況をなんとか打破しなければ！！

「あんたは人と距離置きすぎ。そんなんじゃいつまでも対人恐怖症治んないよ」

「だだだからってななんで」

「ほらその汗。ドモリ。家族相手にそんなことじゃあんたの学校生活心配なのよ。せめて私相手に練習しときなさい。触ったら殺すけど」

触ってたまるか気持ち悪い！！僕のプライベート空間は！？男子のデリケートゾーンをどうしてくれるんだよ！？横暴だ！！ウクライナの秘密警察かこいつは！！

「……」

「周蔵？」

僕の脚は実に自然に部屋の扉へと向かう。敗者は去るのみ、いや別に負けたわけじゃないとは思うんだけど。

「ちょちょちょっとコンビニ行って来る」

「あ、私抹茶オレ買ってきて」

「え……でででも」

「寝ないで、ま・っ・て・る・か・ら！」

「ひ、ひゃい」

もはや退路は絶たれた。

なんて素早い包囲網。姉はよく言えば意志が強く、悪く言えば頑固娘。意志決定に到るまでの道筋でかなり考え抜いて行動に移すタイプなので、一度決まってしまうと姉自身も自分で決めた決定に振り回されるほどの融通の利かなさ。

なので僕なんかが何を言っても姉のイカレた行動を修正するなどムリ！！

この時点での『悪』とは姉の決定に従わないモノ全て！！プーチンばりの強権主義者、それが新木古都（１８）なのだ！！

僕は地面に肩が付くんじゃないかってくらいがっくりと、深夜のコンビニを重い足を引きずりながら向かったのであった。

18

「いぃやっふううううぅっ！！」

コンビニ帰りの薄暗い路地裏で僕は勝ち鬨を上げる。さあ歌え！踊れ！幸運の女神のケツを蹴り上げろっ！！

おつりの２００円、それを投入した瞬間手ごたえはあった。微かに心が震えたのを感じつつ、スロットを３６０度ムリムリっ！と回転！途端ゴロリとそいつは姿を現した！

それをオモムロに捻り上げカプセルを開放、中から出てきたのは○まごっち状のピンクの球体。そのド真ん中に配置された大き目のボタンをｗｋｔｋしながら押し込むと……

『おー！』

『ぷちとまとボンバー！』

『なんだっけ』

次々再生される短い台詞の大洪水。僕は声オタではないのだがわかるよ！！君らの気持ちはわかるようっ！！ついつい連打してしまう中毒性があるよ！？ぽち。

『私が……いてもいい居場所がほしい』

あるんじゃないかな！！どこいってもいいんじゃないかな！？

なんだこのむずがゆさ！背徳感！上がったテンションのやり場の無さ！！この感情を「キモチガ悪い」と切って捨てるのは容易い。しかし無かったコトにするには余りにも衝撃はデカく、爪あとは深い！！

いかーん、ハマッってしまいそうだ。とりあえずコレを持って帰り姉に見つからないように速やかに中の人を特定するとしようじゃないか。んで落ち込んだときにそっとポチる……いいんじゃないかな、なんかいい買い物したなあ！！

がちゃり……かこん。

ん？

３台となりのカプセルトイの販売機。そこにいつのまにか人影参上。

がちゃり……かこん。
がちゃり……かこん。
がちゃり……かこん。
がちゃり……かこん。

おいおいおいおい。なんとその人影は機械的に次々お金を投入しぐりぐりとスロットを回す。そして中身を改めることなくすぐ脇に設置されたゴミ入れに放り込んでいた。

がちゃり……かこん。
がちゃり……かこん。
がちゃり……かこん。
がちゃり……かこん。

アレだけ回せば中にはレアモノも入ってるんじゃないのか？ってい

うか興味ないならそんなもの回すなよ。

がちゃり……かこん。
がちゃり……かこん。
がちゃり……かこん。
がちゃり……かこん。

……。いや、いいよ別に。……僕に害があるわけでも無いから。
でもさ、お金の価値ってあると思うんだ。

がちゃり……かこん。
がちゃり……かこん。
がちゃり……かこん。
がちゃり……かこん。

なんなら僕が人影が去った後で回収なり物色なりすればいいわけで。
まあ多分やらないけど。

がちゃり……かこん。
がちゃり……かこん。
がちゃり……かこん。
がちゃり……かこん。

「って！！ああああんた！！」

「はぁあ！？」

パーカーのフードを目深に被っているので顔は分からないが、ほとんど水着のような面積しかないジーンズから突き出た真っ白く細い足、華奢な肩幅、どうみてもオンナ。オンナＤＱＮだった。

「なな何が目的なのかしし知らないけど……しょしょ職人仕事にには敬意をははははらえよ！！」

「なにあんた……バカ？オタク？」

「ぼぼぼくがオタでばばバカなのは、関係ななない！！」

「ん……？あんた……」

オンナはフードをぱさりと脱ぐ。距離の開いた街灯の明かりでもすぐに分かった。

「カジと一緒にいた1年？」

自意識過剰なのは深夜であっても健在なようで、薄暗い裏路地に到ってもその睫毛や唇は不自然な威圧感を発している。んが！！しかし！！

「だだだから！！ぼぼ僕が誰といた何年生でああああっても！！あんたがどどどこかの誰かのここコダワリを踏みにじったことには、かか変わりない！！」

「ちょ……おちつけよ。いきなりそんな」

「そそそんなポンポンすす捨てたら僕のおお雄たけびがバカみたいじゃないか！！」

「知るかよ……なに言ってｎ」

「そそそのか、カプセル一個一個に人を一喜一憂させるちち力があるのに！！あんたが捨てたそれ！！違う人にはか価値のあったモノかもし、知れないじゃないか！！」

「おいおい、あたしのハナシを……」

「才能のある人からささ、才能を認めた人たちへのバイパスをここ壊すなよ！！」

あああ！！どんどんむかついてきた！！
そこでしか生きられない、そんな人たちはいっぱいいて……自分の殻からはみ出しても怖くても多分みんな頑張って折り合いつけてやってるのに。誰にも迷惑かけてないし彼らの生産活動を嗤う権利がこいつにあるのか！？あるわけない！！そんなもの誰にもあるわけないんだ！！

流れる沈黙。しかし引くわけにはいかない。なあに、沈黙には僕は慣れっこだ。
微妙な空気の中に存在する、まさにＴｈｅ　ｗｏｒｌｄ！！さあ！！酸欠の金魚のごとくのた打ち回りやがれ！！

「……」

「……」

あ……あれ？余裕？
オンナは明るく染まった量の多い髪の毛をわっさわっさ揺らしながら僕を睨みつける。僕の心が早くも悲鳴を上げそうです！！ち、…

…沈黙こわい！！なんか言ってくれよ！！お願いします！！

「あーメンドクセー。なんなんだよお前は」

自意識過剰オンナは気だるそうにそう呟くとすっ、と路上に屈み込んだ。

「手伝えよ。サイノーなんだろこれ」

ゴミ箱からカプセルをひとつ取り出しパカと中身を僕に突き出す。

「持って帰るから。手伝ってくんない？」

「……あ、うん」

僕はゴミ箱に身を乗り出し中身の入っているカプセルを選り分けて取り出していく。ひとつひとつオンナに手渡し、オンナはパカリパカリと中身を取り出す。

「……」

「……」

薄暗い中での沈黙。パカリパカリと間抜けな音だけがコダマしている午前１時。

「ふ……ふふ」

暗がりでオンナの肩が揺れていた。

「あー！夜中になにしてんだあたし！パカパカパカパカ馬じゃねーっつーの！！」

何がツボだったのか？

オンナは妙におかしげに次から次へとカプセルをパカパカしていく。

「とうっ！！」　パカ

「うりゃっ！！」　パカ

19

「ほら、おごり」

「ど、どどどうも」

『ちょっとまってろ』そう言われホントにボケッと待っていた僕は阿呆なのか？オンナの手にはぎっちり詰まったおでんの串が溢れんばかりの大き目のカップ。それを手渡されどうしたらいいのか分からない僕にＤＱＮオンナは声を掛ける。

「でも変わってんな……チャラそうに見えてオタクって。完全に無駄使いって感じ。あっつ」

湯気が立ち昇るカップから牛スジを取り出しワイルドに齧り付くオンナの横顔は、さっきまでの威圧感は無かったかのように幼く見えた。

「ささささっきは……なんで？」

僕のたどたどしい問いかけでも何が言いたいのか察したようで、アタマをワサワサかきながらバツの悪そうな表情でこちらを見る。まあ相変わらず僕の視線は曖昧に泳いでいるわけだが。

「今日中に使っちゃいたい金が余っちゃってさ。何でも良かったんだけど。こんな時間でお店も閉まってるし」

「……」

このオンナの口から『お店』と出てきたことに危うく萌えそうになった。あっぶねえ！！あっぶねええっ！！
しかし言ってる内容自体は僕にはよく理解できない。

「もももったいないよ」

「まあね。でも」

・・・・・・・・・・・・・・・
価値の無い金ってあるんだよ、オンナはそう言いながら大根に齧り付く。とことんワイルド、ここは食堂でも自室でもない往来だというのに。

「あ、そういやあんたの姉貴、新木古都なんだろ？」

「うううん」

「どっちなのよ……まあいいや。あの堅物の弟かあ、……よく似てる」

「ははははじめて、い言われたよ」

「そう？あんた女顔だし融通利かなそうなトコとかそっくりだと思うけど」

「わわわからないけど」

「いいなあ……あんな感じ。あたしもあんな風になりたかった」

「……？」

嫌味か？でもそんな風には見えないし。

ジジ、と街灯の微かな瞬きにうっすら照らされ一向に動こうとしないオンナ。人影も無くなって久しいというのに帰る気配ゼロ。多分このオンナは今僕が立ち去っても全く気付かないんじゃないか？そう思うほど虚ろな目をしてビルに背中を預けている。

「なあ」

「なななに？」

問いかけはするもののやはり空虚な横顔。今の僕にはこのオンナがすごく小さく見えた。

「あんた童貞？」

「がぶばっ！？」

鼻から飛び出すちくわ。なんかつーんてした。つーんて。

「じゃなきゃオタクなんてやってないよねー」

「……！！」

あああああやまれえええええっ！！全国の自宅警備の職にイソシム同志たちに謝罪しろおおおおっ！！

なんだその余裕の表情！！言っておくがぼぼ僕が本気出したら3次

元の女なんかすぐだすぐ！！なんか吊るしたり足とかでされたり…
…そんなんだろ！？ららら楽勝だよラクショー！！イメトレ何年やってきたと思ってんだコノヤロウ！！

すくりとジーンズのケツを叩きながら立ち上がったＤＱＮは「さて」と呟きながら僕の方を見る。

「相手してやるよ」

と、『ショーユ取ってくれない？』的なテンションで僕の袖をそっと握った。

「いや、おことわりします」

びくり、と握った僕の袖から伝わる振動。見開かれた派手な瞳。

「いや、だからさ」

「おことわりします」

ぽりぽりとアタマを掻くオンナ。なにやら深呼吸をしているようでＴシャツの胸の辺りが激しく上下する。

「いいか良く聞いて。あたしＢ８６（Ｄ）Ｗ５７Ｈ８５で完璧モデル体型なの。てかたまにモデルやってるし。理解した？」

「ははははい！」

詰め寄る迫力が半端無い。さっきまでの様子が一変、ただのＤＱＮに変化を遂げている！！

「言い寄る男もいっぱい。それこそ学校でも街中でも、スカウトなんかしょっちゅう」

「ははは！りょりょ了解ししました！おお綺麗だと思います！！」

派手な装飾もコダワリと言えばコダワリだ。毎日毎朝かなりの時間を割いているのだろう。そしてその上でのスタイル維持。その辛さは僕にも経験があるので多少わかる。その徹底振りは尊敬できるコダワリ気質だ。

「そのあたしが相手しｔ」

「おことわりします」

ぶるぶるとわななく唇。かなりの圧力が加わっているんだろう歯軋り。あ、ちょっと涙ぐんだ。

「……黙って聞いてりゃこのオタクヤロウ！！なんで拒否る時だけ噛まずにスラスラしゃべってんのよ！！」

あ、そういえばそうだ。不思議なこともあるもんだな。
僕は胸倉を掴まれながらも割りと冷静にそんなコトを思う。

「こっちは善意で言ってあげてんの！わかる！？」

「なななんとなく」

「じゃあ断る理由ないんじゃないの！？」

「でででも」

「でもなによっ！！」

「べべべつにセックスししししなくても、ななにか辛かったんなら、はは話してみればいい、いいんじゃないかな？」

胸倉にぐっ、と込められた力には大して威圧感を感じられなかった僕は……どうんとした重量を持ったオンナのアタマが僕の胸に当たっても断続的なオンナのしゃっくりのような声が聞こえてきたところで。

もう怖いと思うことはなくなっていた。

20

怖くは無い。怖くは無いんだけど。
僕の胸にトンと置かれた顔辺りからずるずる蕎麦でも食べてる音が響いてきたかと思うと同時、痛いくらいの力で僕の手のひらを握り締めるＤＱＮ（♀）。あまりに突拍子もなかったので僕の頭の中の処理はおっついていなかった。
これはイベントなんだろうか？大した選択肢は無かったよ？それに僕はこのオンナのコトを好きな訳でもないし、このオンナだってそうだろう。
リアルは理解しがたい。この展開はグッド・エンド？バッド・エンド？いやそもそも終わってないし。

「あああの」

「ちょっと静かにして。今キューシュー中。ぐじゅ」

九州？

「吸・収」

「りょりょ了解」

なんでバレたんだ？

……。

オンナは僕の手をただ握り続ける。硬く目を閉じ息さえ殺して。なんだか必死である。僕は宗教には縁がないが『敬虔な信者』ってのはきっとこんな顔で祈るんじゃないだろうか……などとカッコつけた事を考えていた。

なにがあったかは決して言おうとしないがきっと僕なんかでは役に立たないだろうし、期待されてもいないんじゃないかな。

でもこうしていたいならさせておこうと思うんだ。

震える手に尚、力が篭る。

今必死な顔で何かを無理やり押え付けてるこのオンナは……ＤＱＮでもなく自意識過剰でもなく、捨てきれないモノを捨てきれないでいるだけなんだろう。

そのコダワリはすごく尊敬出来るし、この真剣な顔ならきっと周りの誰かが手を差し伸べてくれるんじゃないだろうか？

僕はちょっとだけこのオンナを羨ましく思った。

それまでの代用品として、僕の汗ばんだ手のひら、か貸してあげないこともないんだからねっ！！かか勘違いしないでよっ！！

「……よし！」

ぱっ、と顔を上げたオンナが真っ直ぐ僕の目を見た。不意打ちだったので避ける間も無くぶつかる視線。

「おお出る出る！お前手汗すごすぎ！」

「しょしょしょしょうがないんだこれはっ！！たたた体質で！！」

「いいよ今さら。とっくにヌルヌルだし」

「いいいいからこっち、みみ見るなよ！」

「テレてんのー？言っとくけどもうヤラせてやんないから！残念だったねドーテー君！」

「ちち違う！！」

やっぱり3次元は理解不能！なんだこの豹変振りは！！まったく謎のジョブ・チェンジだ！！……はっ！！まさか……コレが噂の解離性人格障害ってヤツなんじゃ！！ちょっと……やだなにそれかっこいい！！正義のシリアルキラーがドキュンと解決！？やややややっぱりスカート履いててもビュンビュン飛び回ったりするの！？するんだろうなあ！！

「いやー、悪かったね付き合せて」

「ぁ……べべべつに」

今ちょうどＤＱＮオンナが炎で出来た剣を振り回していたところだ。別に悪くはない。

「帰るよ」

「あ、あああ」

「なんだよ？大丈夫だよもう……そんな顔で見ないでくんない？」

僕はどんな顔をしていたのか。サッパリ見当も付かないがきっと間抜けな顔をしていたんだろう。証拠にＤＱＮオンナの整った顔まで

クシャッと崩れて、なんだかおかしな顔をしていたから。

「意外に利くのかもね」

「なななにが？」

くるりと背中を向けたオンナは星も見えない夜空に両手をかざし、深夜にも関わらず大きな声で。

「たすけてー！ベクトルマーン！」

と叫んだ。

「なななぜそそれをおおおっ！！」

「じゃ！あたし柚木カナ！忘れたら殺すからな！」

とん、と軽くアスファルトを弾くように細く長い足が駆けていく。どんどん小さくなっていく背中は曲がり角で完全に消えた。残された僕は特に寂しい訳でもなく、不思議とあったかくて……おでんって体感防寒すごいんだなあなんてどうでもいい事をボケッと考えていた

「……」

んー？でも結局よく分からなかったなあ。でもまあ。

「お巡りさんこっち！こっちから『たすけて』って悲鳴が！！」

ん？

「こっちかい！？……誰かいますかーっ！！」

揺れるライトの明かりは薄暗いアスファルトをなぞりながら間違いなくこちらに向かってくるではありませんか！！

「……」

うわあああああああああっ！！

住民巻き込んでの治安維持、防犯意識の高さ！！お疲れ様です！！

それでは僕はこのへんで！！！！

20（後書き）

初投稿でイマイチ機能が分かっておりませんが『お気に入り』やポイント（？）ありがとうございます！嬉しいです！

21

毎朝のランニングの成果をフル活用し自宅マンションまで転がるように逃げ帰ってきた僕。何もしてないとは言え公的機関の権力を鵜呑みにしない僕はクール・ダンディー。且つ、ソーキュート。追っ手を隙間風のようにするりとかわし、愛すべき自宅の扉の前でノブを掴んでいるのだが……体が硬直して動けないでいた。

なんだこの邪悪なオーラは。僕は『凝』ばりに注意深く辺りを観察すると入り口の扉、その輪郭に沿って漏れ出している紫色の澱んだ瘴気が窺えた。大型の乾燥機の如くシューシューと絶え間なくあふれ出すソレはとても僕なんかの手に負える類のシロモノではないのは明らか。これはもう彼の出番でしょう。しかめっ面で博識で、黒装束の古本屋である京極ｄ

「はいおかえり」

「ひゃあああああぁっ！！」

いつの間にかわずかに開かれていた扉、そこからにゅるりと伸びた手が僕の手首を優しく掴む。力自体は入ってないのに解けない！？それどころか体の力が吸い取られるように足腰が固まってしまった！！

「早く入りなよ、近所迷惑でしょう？」

優しい！！優しいだけにエゲツナイ怒りを感じる！！音も無く問答無用で開かれていく扉。

「心配したんだから。ああ、もう3時なのねえ」

なぜ笑顔!?姉は玄関の時計を確認し貴婦人のようにふふ、と笑う。姉の威圧感に縦横無尽に蹂躙されていく僕の心。……いや!まて!逆に考えるんだ!!自らの正当性を力の限り掘り返し論理的に対処するのだ!!はっきり言って疚しいことなど何も無い!!それに僕はもう高校生なのだ!!夜遊びのひとつやふたつは許容して頂く!!少々帰りが遅くなったからといって咎められる筋合いではなーい!!

「どこいってたの?」

「ちょちょちょっと寄り道し、してた」

だらだら流れる汗が目に入って染みるが堪えるのだ!!ここは分岐点!!今後の行く末まで影響を及ぼすであろう重要なフラグ!!大体新婚夫婦じゃあるまいし引け目など感じるほうがどうかしてるのだ!!

「私待ってるって言わなかったっけ?ひょっとして言い忘れたかなあ」

僕の脱いだ靴を下駄箱にしまいながら独り言のようにぽつりと漏らす姉。当然だが、姉が僕の靴をしまうなど初めての行為だ。姉のメンタル方向への追い込み具合が加速して襲い掛かってくる。

「ぼぼ僕はべ別に」

「香水くさい」

「って……え」

「香水くさい」

「いや……あの、こここれは」

「香水くさい」

あのＤＱＮオンナか！！確かに姉のふわりとした謎のイイ匂いとは違う主張のキツイ香り。相手に意識させる事を明確に目標にした人工的なフェロモン。その香水の存在意義は僕をすっとばして姉に作用したようだった。

「まずお風呂、でそのあと話し聞くから」

「いいいまから？ももうおお遅いし朝にでも……」

「なんだか気分が悪くなるのその匂い。はやく落としてきて」

「あああとはね寝るだけじゃ……」

僕の耳の横を物凄い速さで何かが通過したと同時、ばんっ！！と激しい激突音が響く。一拍置いて姉の腕が僕の背後の壁に手を付いたのだと理解。

態勢的に間近に迫った僕と姉の顔。目を逸らす事も出来ない僕はここ最近では一番の降雨量、記録的な大雨が背中を伝う。

「まだ朝まで時間あるから。はやくね」

そうニコリと微笑むと姉の背中は僅かの迷いも無く僕の部屋へと消えていった。

「……」

な……なんだよ!!なんなんだよあれは!!
僕は何だ!?同棲はじめたばっかりのヒモオトコか!?おまえは僕の姉だろ!?がっつり血の繋がった完全無欠の肉親じゃないか!!
っていうか姉の圧が凄過ぎて僕の心の中のツッコミも無くなっちゃってるじゃないかあっ!!僕のリーゾン・デートル返せようっ!!
お願いだから返してくださいようっ!!アブノーマルなラブコメハンターイ!!お笑いバンザーイ!!

そう、心の中で血の叫びとも言えるシュプレヒコールをばら撒いた僕は、今風呂場で血が出るほどごしごしタオルを自分の体に擦り付けていた。

だってこわいもの。

22

僕は脱衣場に置かれてあったパジャマを着込みいざ自室へ。なんか息苦しいし、ちょっと足が震えているがいつまでも廊下で突っ立ってる訳にもいかず意を決して扉を開けた。

「……」

「……」

黙って僕を見る姉。何も言ってこないのをいいことにさっさとベットに移動する僕。
姉は持ち込んだ布団で横になりながら静かに僕に言った。

「ぶっちゃけ、正直に答えて」

沈黙以外返すことの出来ない僕はもぐりこんだベットの中で黙って姉の質問を待つ。星は無いが月の見える薄暗い夜。

「あんた私のコト嫌いよね？」

「うん、……ってい痛い、いたいってば！！」

ばっしんばっしん枕代わりのクッションで僕を力任せに殴りつける姉。

「そんなはっきり言うことないじゃないの！！」

ばっしんばっしん

「だだだってしょ正直にって！！」

「それにしたってもう少しデリカシーとかあってもいいんじゃない！？」

ばっしんばっしん

「ささ最近おおおかしいよ！？どどどうしちゃったのさ！？」

「あーおかしくて結構！！私は決めたの！！」

ようやくクッションを手放した姉は昔のロボットヒーローのように目から光線でも出しそうな視線で僕を見る。この眼。これはヤバイ。ＣＡＤの設計技師のような僅かのズレも許さない厳格な瞳。つまり……新木古都の瞳だ。

「間違い続けて逃げ続けるのはもう辞めるの！！」

「ははあぁあ！？」

言っているコトが漠然としていてサッパリ分からない。これは本当にいい病院を探さなければ……

「タウンページ開くな！！」

「はぶぷっ！！」

クッションとんできた。

「あんたがそんなふうに人と付き合うのが苦手な理由、私なんとなくわかるの」

暗がりで表情は全く分からないが少なくとも冗談を言っているわけでは無さそうだった。あいかわらずあの『瞳』だけが僕を捕らえて離さない。

「お母さんが居なくなってあんたストレスでどんどん太って。父は最近きたばかり、血の繋がりもない」

ストレスだったんだろうか?自覚は全く無い。が。

「元々友達少なかったあんたは、すぐ孤立した。外見のキモさもあったし」

おーい!だれか告訴用紙!この無礼な姉を告訴するぞー!!

「学校でハジかれたあんたが逃げ込める場所。『家庭』」

なんだかテクニカルに嫌がらせを受けているようでふ・く・ざ・つ!

「なかったよね、『家庭』」

特に気にしたことないよ。

「避けてたの私。朝ごはんとかなんだかんだ言い訳して一人だけ早く食べたりして」

そんなことはとっくに知ってたぞー。なにをいまさら。

「あいさつもしなかった。だってキモかったし」

てめえコノヤロウ!!さっきからなにが言いたいんだ!!

「最終的にあんたを追い詰めたの、私」

ナルシスティックな気分なのか!?自分さがしのＯＬかっ!?ヨーグルトでも食べてろ!

「逃げ帰ってきた家で、姉の私が学校の皆と同じ目であんた見たらそりゃあ逃げ場無いよね」

全く覚えてねえし!てか逃げてねえし!

「だってあんた……昔は普通に喋ってたもんね」

そう……だったか?本当に覚えが、無い。

「あんたはいっつもそう。学校はなんだかんだ休まないし、我慢続けて赤面症やら失語症やら。それでも」

いやもう……止めてくれないだろうかマジで。

「太ってても痩せても。そんなこと関係ないのに」

まいった。ここまでへこんだ姉は初めてだ。

「だから」

いや、ちゃちゃチャンス!?ここでコイツの心を抉る○メハメ波をぶち込んで、今後一切生意気な態度を取れなくしてやろうか!!なにがいい?なにか効果的なワンフレーズは……

「ごめん」

「ななに謝ってんだよっ!!」

あ、あり?

「人のせいになんかしない!!ぼぼ僕はぼくで……どうしょうもない僕は僕だけの僕なんだっ!!」

エキサイティング!?コレが噂の妖精『エキサイティング』なの!?

「かか勝手に責任背負い込んで、それでまま満足なのか!?じょじょ冗談じゃない!!そんな風に、いい言われたら」

姉は相変わらずシルエットでしか認識できないが、時折見せるブレ、振るえ。それでも僕はいわなければ。

「姉ちゃんや父さんが……間違ってたってことになるんだぞ!?」

そうなのだ。ガツーンと言わなければ。

「み、みんな頑張ってたじゃないか!!そそ、そんな人たちが間違ってたって……無責任に言ったらダメだ!!」

「……周蔵」

イノシシみたいなこの姉は全部背負い込もうとするから。

僕は姉ちゃんに人差し指を突き出し宣言する。

「僕はちゃちゃ、ちゃんと何でも出来るから!!みみ見てろよ!!僕のエンジョイ・ハイスクールライフを!!」

「……うん」

「りり立食パーティーとかしてやるからな!!」

「……うん」

「きき金髪の彼女とかつつ連れてきてやるからな!!」

「うん、お姉ちゃん待ってる」

「おおお姉ちゃんとか!!やめろよ恥ずかしい!!」

「周蔵が呼んでくれた。さっき」

「よよ呼んでないっ!!」

「呼んだもん。聞いたもん」

二ヒッと笑った姉の久しぶりに見る何の裏もない笑顔。僕はなんだか背中がむずむずとしていたが、年に一度位ならこんな笑顔もいいなあ、とちょっとだけ思った。

23

「周蔵！ご飯できたよ！」

バンバンと勢いよく叩かれる扉。
ほとんど寝ていないというのに元気な事この上ない。僕はオモムロに時計に目をやるとなんと6時22分。この時間だとまだ父が出かける前、今まで姉がずっと意図的に避け続けてきた時間帯。だというのに……

「……」

食卓にはすっかりパンやらハムエッグやらが3人分ずらりと並べられていた。制服にエプロン姿の姉、飄々とした変人・父も少しばかり落ち着かない様子でコーヒーをガブ飲みしている。

「今日は……早いな2人とも」

こころなし声が震えているようだ。

「お父さん今日は帰り遅くなる？」

ぴきり、と父に入った亀裂。姉の問いかけに目を丸くして手にした新聞を落とした。

「ああ……そんなにでもない。いつもどうりだ」

僕に視線を寄越す父。僕は姉ほど父に距離を取っていた訳ではないので僕に助けを求めた父だったが……あいにく僕もトバッチリは避けたいので無視。

「そっか。じゃ夜も3人で食べられるね」

真っ赤な顔でニッコリ笑う姉。その顔を向けられた父は無言で立ち上がり、リビングにあるソファーに向かってボスボスと左右の拳を繰り出す。無論はじめて見た姿だった。

「ちょっとお父さん？食事中に……」

「ああ！ちょっとしばらくほっといてくれ！発作だ発作」

ソファーに拳を繰り出さざるを得なくなる発作、実に興味深い症例だ。急いでまとめて来月の学会に報告の準備を……

「あんたもちゃんと帰ってくんのよ！昨日みたいに遊び歩いてたら姉ちゃん怒るからね！」

そう真っ赤な顔で僕に宣言する姉。いやあ、実にキモチワルイ！！清々しいほど醜悪なホームコメディー。

「オトウサン行ってくる！ちゃんと帰ってくるからな！」

見事な棒読み。国籍間違えたかのようなたどたどしさ！

「いってらっしゃい！」

姉も涙ぐむほどテレるならやんなきゃいいのに。

しかし……なぜか否定する気も起きない。
姉は家族を再生する気なのだ。血の繋がらない父と対人恐怖症の弟、当の姉本人だってセレブぶってはいるが本性は猪突猛進の近視眼的な高校生に過ぎない。本人もよく分かってない家族という共同体の輪郭をなぞっているだけなのだから醜悪なのも当然だ。
でも、そもそも醜悪で無い家族ってどんなん？と聞かれてもやっぱりよく分からないのだ。昔やらなければいけなかった軋轢のすり合わせや齟齬の修正。それを意図的にむりやり再開しようというのだから、姉の決断ならびに実行力は凄まじいモノがある。
そのうち僕にもなにか出来ることがあるかも知れない。そのとき僕は姉のようにステキな笑顔で「いってらっしゃい」と、そう言えるだろうか？
先のコトは分からない。でも……
僕たちの戦いはこれからだ！！新木先生の次回作にご期待ｋ

「勝手に最終回にすんな！」

「ぶぼっ！？」

かばんでアタマ叩かれた。

「ななんだよ！さっきまでやや優しかったじゃないか！！」

「続かないのよしょうが無いでしょ慣れてないんだから！！さっさと学校行くわよ！！」

ママゴトみたいな朝食を済ませ僕らは学校に向かう。
継続は力、すなわちコダワリの結晶というわけだ。うん、この考え

は悪くない。
じゃあ精々コダワッて一般カテーってヤツを作ってみようじゃありませんか。モノ作りという響きはオタ心に実に良く響くし。

電車から降りた僕と姉、……僕らの第２の共同体である学校を目指しちょっとだけ暖かくなった風に煽られながら、姉は僕を見て照れくさそうに笑った。

姉2

ここ数日、平穏な日々が続いていた。周蔵は相変わらず家でも学校でも無愛想、というか出来る限り他人との接触を避けているようだが……お昼は必ず中庭で梶君や背の小さな女の子と和気藹々としてる……かは微妙だけど食べてるし、わりと無難にこなしてるんじゃないだろうか。

それに接触を避けている、とはいえ以前のような棘が無くなってきた様に思える。まあこれは家族の贔屓目かもしれないけど。

それより問題は私だ。

上手にやってきたつもりだった。3年までくまなく隙なくいろんないざこざを処理してきた。

私は3年過ごしてきて初めて訪れるような端も端、体育館の裏にある水泳部の更衣室。更にその奥に足を踏み入れている。こんな場所があったのかと感心してしまうような学校内のエア・ポケット。誰の視線も届かない死角のそのまた裏。

「ハジメマシテー」

慇懃無礼。厚顔不遜。人をこんなトコに呼びつけておいてフザケタ挨拶。さて、どうしてくれようか？

「柚木サン？私あなたと面識あったかしら？」

「いや、ないね。同じクラスになってもない」

「で？ハナシって？」

「いや、それがさ……うーん」

不自然なほどアップされた豪奢な髪。ぎりぎり見えないくらいの丈しかないスカート。上着のポケットから覗くブランド物の財布。綺麗なコだということは認めるが、全体的に『媚びて』いる。男、視線、欲、ｅｔｃ。

それが悪いとは言わないし好きにすればいいとは思うがそれは私の目の届かない場所でなら、という条件つきである。

「私あまり暇じゃないの。なんにも無いなら帰るけど」

「ちょ！ちょっとまって！お願い！」

意外だった。

私の手首を掴んだ柚木さんの目はあからさまに困惑していて、これではどっちがイジメテるのか分からなくなる。

「どうしたの？すごい汗」

いわゆる『テンパッた』状態。まるで周蔵みたいな流れる汗に毒気を抜かれる。私はハンカチを柚木さんに手渡した。

「あ、ありがとう」

「いいよ。でもホントになんなの？『ハナシがある』って呼び出されたから私てっきりあなたになにか恨みでも」

「ちが！ぜんぜんそんなんじゃない！ホント！」

きれいに纏められた髪に無造作に手を差し入れアタマをかく柚木さ

ん。首筋の汗を拭いながらも「あー」とか「うー」とかうめき声を漏らしている。

「あ、あのさ！」

うつむきながら意を決した様子の柚木さんはそれでもまだ私の顔を見ない。ホントになんなんだ？

「あんたの弟……」

「周蔵？あいつ柚木さんになんかした！？」

ありえなくは無い！大体なにするかわかったもんじゃないしあのバカ！

「彼女とか……いるのかな」

「私からでもいいなら謝って……え？」

「だから……付き合ってるヤツとか、いる？」

いまいちよく分からない。顔を真っ赤にした目の前の派手な女の子と周蔵の彼女の有無、これが全く結びつかない。

「いない……と思うよ」

「ホント！？」

ぱっと顔をあげた柚木さんは、なんだかとてもキラキラしていた。

「じゃじゃあ好きなタイプは!?どんなんが好きなのかな!?」

「えーと……」

言えない。とてもアニメキャラクターだとは言えない。この顔を見てそれを告げる勇気は私には無い。

「じゃあさじゃあさ!いままで付き合ったヤツのタイプとかどんなんだった!?」

「ちょ、ちょっとまって柚木さん!確認しときたいんだけど」

「なに?」

「遊びでちょっかいかけるつもりなら止めて。あなたオトコなんか困んないでしょ?」

「……」

「アイツはバカだけど大事な弟なの。別にアイツが誰と付き合おうが構わないけどハナから遊びなら誰か適当なオトコでいいでしょ。多分アイツつまんないよ」

柚木さんは黙っている。ただの興味本位なのか悪食なのかは知らないがどちらにしても好ましくは無い。ってかむかつく。

「正直いうと……よくわかんない」

「へ?」

私のなかで柚木さんのキャラクターがさっきからブレまくっている。随分不安定なコだ。会った時から中々要領を得ず矛先を逸らされっぱなしでどうも調子が出ないや。

「わかんないの！妙に声が聞きたくなったり、いざ話しかけようと思っても、あたしこんなんだし迷惑だったらどうしようとか思ってビビッちゃって……どうしたらいいんだこれ？」

「私に聞かれても……ねえ」

「これって遊びなのかな……自分でもホントにわかんないの！近寄ったら嫌われるのが怖いし、でも……あーわかんない！イライラするの！最近！ずっと！」

おーい周蔵。

「やっぱあたしみたいなのが近寄ったら迷惑かな？あいつ真面目そうだし！どどどう思う新木さん？」

あんたエライコトになってるぞー。何したのよ全く。なんかアホらしくなってきたよお姉ちゃんは。

「ねえってば！」

泣きそうに潤んだ目。不審な挙動。発汗。赤面。恋する乙女だね間違いない。

しかしまあギョーザにマヨネーズみたいな見事なミスマッチ、うまくいきそうには全く思えないが。

「……」

やっぱり、この不安そうな顔を見たら言えない。
なんだかキラキラして……かわいいんだもの。

24

「おう、コラ」

「なななんだよ」

相変わらず僕と理子、万力ゴリは誰もいない中庭で昼食を取っていた。なぜか日常化してしまった異様な景色。僕は不本意ながらも毎日毎日こうして芝生にぺたんと座って昼休みを過ごしているわけだが……

「なんで毎回理子がパシリなんだよ」

「し、知らないよ。ちゃんとじゃ、ジャンケンしてるじゃないか」

恒例となった食後のドリンク。三人でいつもジャンケンして決めているのだが結果は理子の全敗、神がかっている。弱すぎる。僕とゴリは一度も買いに行った事がない。理子に気にした様子は全く見えないのだがこのゴリヤロウは大いに不満のようだった。

「てめえが気ぃ利かせて買って来いよ。カワイソウだと思わねえのか？」

最近気が付いたのだが、このゴリ妙に理子に甘い。しっぽを振るように大きな目で懐くのが可愛くて仕方ないようなのだ。極度の寂しがりでちっちゃい捨て犬のような理子だが、ベタベタ甘える訳ではないしむしろ体育会系の機敏さを見せることも多い。生まれ付いて

の後輩気質。性善説を信じさせてくれるヘンな女。ゴリ程ではないが僕だって好感は持っている。

だがしかし。

「ぼ僕は勝負は勝負だと、お思う。いインチキしてるわ訳じゃないし」

男女逆差別など許してたまるか。全ては理子のツキの無さ！己の生まれ持った星の力！パシリ属性がデフォだった理子はその性能を遺憾なく発揮しているだけなのだ！

「……てめえ、明日グーだせ」

「いイカサマか？そそそれは逆に理子にし失礼なんじゃ」

「オレもグー出す。で、てめえと俺で決勝戦でどうだ？」

「い、異議ナシ」

理子のパー率は確かに高い。僕もゴリも気が付いていたが……多分明日も理子が買いに行くことになるんじゃないかと思う。なぜなら僕やゴリが気を使ってグーを出すとき、決まって理子はチョキを出す。だから全敗なのだ。勝負運はとことん無い。

「おまたせー！買って来たよー！」

芝生をさくさくと駆けてくる理子。舌を出している幻覚が見えるほど子犬っぽい。

「そんな走んなくてもいいぞ！危ないからな」

新婚パパかお前は。溺愛すんな。

「はい！梶先輩の牛乳！シューゾー君はアイスティー！！」

印籠のようにパックジュースを突き出し誇らしげな理子。

「悪いな……って理子、お前自分の分は？」

「のど渇いてたからさっき飲んじゃった！」

と理子はカラのパックをプラプラさせる。ポイ捨てせず律儀に持っている所が理子らしい。

「じゃあコレ飲め」

「おおい、それぼ僕のあアイスティーだろ！？」

「てめえは雨乞いでもしてろよ」

「いいいつまでかかかかるんだよそれ！？」

本当に理子が可愛いんだなあ、と目の前のデレたゴリをみて思う。

微笑ましく無いわけではないが、それを相殺して余りある気持ち悪さ。目なんかもうたれっぱなしだし。

「じゃあシューゾーくん！ちょっとちょーだい！」

「いいいよ」

ぷすりとストローを刺しちょっとだけ飲むと理子はパックを僕に両手で手渡した。動作のどこを切り取っても不思議とアザトサは感じられない。稀有な才能だと思う。

「てめえ、まさかそれ飲む気じゃねえだろうな」

ゴリの腕周りが一瞬さらに太くなったように見えたのは気のせいか？

「ちょっとイケてっからって調子乗んじゃねえぞコラ」

……。

……。

「あ！ぼぼ僕牛乳飲みたくなってきた！せせセンパイ交換しシマセンカ！？」

「言えよ！さっさと言えよ水クセえなおい！！」

僕のパックをひったくるように奪い取りチューチュー吸い出すゴリ。危機回避。警戒信号消えました。

見た目は完全にＤＱＮのくせに中学生みたいなヤツだ。

理子はニコニコとゴリに懐き屈託なく話しかけ、ゴリは赤ん坊を前にどうしたらいいのか困惑する休日のパパの顔で照れ笑い。芝生のチクチクしたすわり心地と草の香り。

こんなのも悪くないかも。めずらしく僕はそう思った。

姉3

「行かないの？」

廊下の窓から中庭を覗き込む柚木さん。

「いいいけないよ！あのちっちゃい子スゲーかわいいじゃんか！なんだよもー！」

すっかり自信を喪失している。私の記憶では柚木さんはもっと無闇に堂々としていていちいち派手、少なくとも廊下で涙目を堪えオタクバカの挙動を窺うようなコではなかった。

「ああいうのがタイプなのかな！？あたしあのコと共通点ゼロなんだけど！？」

確かに共通点など探すほうがどうかしていると思う。柚木さんはとにかく、是非は置いておくとして華美。華やかなモノを纏った華やかなコなんだと思うし。

どこを取っても好対照なあの小さな女の子は……なんていうか人工的な香りがしない。きっとあのコは星を見れば綺麗だと思うのだろうし、おいしい物を食べればおいしいと言って笑顔を振りまくのだろう。

人の好みは多種多様、もちろん柚木さんの華やかさに魅力を感じるオトコは全体的に見れば圧倒的多数派なのだろうが、あのバカの好みが全く分からないので柚木さんはただただ脅威を感じている。自分と全く違う魅力を持ったあのコに。

しかし……いつまでも廊下で弟の食事を眺めているほど私も酔狂ではない。ここはさっさと声をかけ、お役御免と……

「ちょちょ！！どこいくの！？」

「え？だから周蔵に声を……」

「いやいやいやいや！！待って！ちょっと待ってよ！！」

私に縋りつく柚木さん。形相には余裕の欠片も見当たらない。

「心の準備ってあんじゃんか！！そんな急に！！ムリだよっ！！」

ふう、と目を閉じ溜息を心の中で吐く私。周蔵も外見と中身のギャップは物凄いが柚木さんも負けてないんじゃないだろうか？普段これだけ見せ付けるような格好をし、現に引っかかる男も数知れないだろうに。言い寄られるのは慣れっこだが、逆に拒絶されることを極端に恐れている。どうやらそこまで悪いコではないようだが……よくわからないというのが本音だった。

「なにしてんのカナ」

廊下を私たちに向かって歩いてくる女生徒二人。見覚えはあるが名前は出てこない。柚木さんの知り合いらしいが……なるほど類は友を、ってやつか。柚木さんほど華はないがやはり2人とも何かに怯えている様に過度の化粧、髪型、同系列である。

「いやちょっとね……はは」

友人に弱みを見せるのがイヤなのか必死に作り笑いを浮かべる柚木さん。このコも忙しいコだ。

「新木さん？随分意外な組み合わせだね」

なぜか私の名前を知っていたようだ。品定めのような視線を私に向ける友人A。この学校でのこの手の手合いはほとんどが『高校デビュー』という不名誉な称号を囁かれる者たちなのは皆知っている。威嚇しているつもりなのだろうが申し訳ないが滑稽でしかない。

「ああ、中庭？耳が早いねカナ」

「え……なにが？」

キョトンとする柚木さん。私は彼女らの言動を注意深く観察する。厭な感じがする。

「カナはいつも参加しないから興味ないのかと思ってたよ」

「なんのハナシだよ？」

「今度おしえるよ。ここじゃ、ね」

露骨に私に滑稽な視線を送り、去っていく2人。クスクスと陰湿な笑み。そして見た。

わずかの間、ほんの一瞬……昏く歪む柚木さんの横顔。久しく感じることの無かった不快な空気。

「……柚木さん」

「え！……なななに！？」

「例えば、のハナシするけど」

「……？」

「あの周蔵と一緒にいる1年生の女の子。あのコになにかあったら私はあなたの事を軽蔑します」

「は！？なななんだよ急に！！」

「嫌いなの私。いやがらせとかいじめとか」

「ハナシきけって！！あたしは別に」

あの中庭。あれは周蔵が手に入れた大事な共同体。本人達にに自覚があろうがなかろうが間違いなく。私にはほとんど奇跡のような光景。なにしろあの周蔵が話し笑えている（分かりにくいが）。

「あなたが状況を事前に知りえる立場なのはなんとなく分かったわ。だから傍観、黙殺、諦観、積極的参加、非積極的参加、消極的賛成、このいずれかの行為を採った瞬間、あなたは私とは相容れない人種」

「おおおどかすなよ！！なんなんだ！？」

その共同体を壊す？しょうもない嫉妬心や僻み根性で？いやいやいや。私は所詮一女子高生でしかないが、学校内のことは学校内の者にしか分からないし実行力は持たない。であるなら。

「脅しかどうか」

「ひっ！？」

私は柚木さんの顔に肉迫し、その大きな眼球を射抜くように見た。

「試してみたら？」

「ふぁ……ひ」

私は許さない。あらゆる手段で一人づつ詰める。誰であろうと。何人であろうと。あの中庭を壊させない。

「ふぁあ……うぇっ……ぐず」

「あ、え？……ゆ、柚木さん？」

派手で見栄っ張りな柚木さんの顔がくしゃっ、と潰れ漏れ出す嗚咽。

「あたし……関係ないもんっ！！そんな怖い顔で……おこんないでようっ！！」

「あ、あの……あれ？」

他人の目も憚らないおおっぴらな号泣。ままま、まいったな。困ったな。

「うわあああんっ！！なんだよう！！もうやだあああ！！」

「あああああ、ご、ごめん柚木さん。お願いだから泣き止んで……」

「うあああああああああんっ！！」

ここここここここ困った、な。

25

「お、あれお前の姉貴じゃねえのか？」

芝生に座り足を投げ出したまま顎で方向を指し示すゴリ。

「どれですか！？シューゾーくんっておねえさんいたの？この学校に！？」

パタパタ尻尾を振りながらゴリに詰め寄る理子。肩を掴まれ興奮気味に騒ぐ理子を横目に見ながら薄気味悪い笑みを浮かべるゴリ。悪気は無いのは分かっているが許される範囲ってあると思うんだ。その顔は懲役モノだぞイカレゴリ。

「……」

確かに姉のようである。誰かと話しているようだが、ハナシ相手の姿は全く見えない。壁の向こうに座っているようだ。しかし……誰かと話す姉の表情が少々硬質な棘を感じるのは気のせいなんだろうか？

『……ぁあああんっ！！』

！！？？

これは！？泣き声！？

「あ、あの……これは？」

僕を見るなよ捨て犬！！そんな顔されたって僕に責任は無い！！てかホントになにやってんだよクサレ３Ｄ！！

「こりゃあまた。振り切った泣き声だなあ。新木サン怒るととんでもねえから。ま、誰かアホウな事しでかしたんだろうな」

……？「しょーがねーな」といった表情で呟くゴリ。ゴリの言葉に僕は違和感を覚える。こいつの言葉には姉に対する非難めいたものが不自然なほど無いのだ。喧嘩は両成敗ってのが世の中の倫理観だと思っていたが。

『あああああんっ！！』

……いたたまれない。すごくいたたまれない。不安そうな理子は僕の顔をずっと見ていて泣きそうになってるし。

僕は芝生に手を突き立ち上がる。ものすごく気は進まないが様子を見てくるか。

「あー。ほっとけほっとけ」

退屈そうにそう言うと、ゴリはアイスティーをチューと吸う。

「でででもケンカななんて」

なんで学校の中で泣かせるまで相手を追い詰めるようなことがあろうか？せめて放課後裏庭とかでこっそりやれよ！！

「ケンカじゃねえぞ多分。新木サンはケンカなんぞと縁はねえ」

「へ？」

「ケンカってんのはお互い様だろ？対等ってことだ。新木サンと対等のヤツがガキみたいに泣くかよ」

「……」

よく分からない。なんでこいつは姉をここまで評価してるんだろう？単にイノシシの機嫌が悪くて八つ当たりしてるとは考えないのだろうか？

「ってことは……どういうこと？」

首をかしげゴリの目を正面から覗く理子。ほんとコイツは裏表無い得な性格だ。分からなければ聞く。シンプルはベスト。羨ましい。

「俺は1年のとき新木サンと同じクラスだったんだが……そんとき新木サンがマト懸けられたことがあってな」

「まと？」

「要は嫌がらせってやつか？この学校は陰険なヤツが多いからなあ」

とても楽しい思い出には聞こえない。なのになぜかゴリはニヤニヤと笑っている。

「ま、3人くらいが首謀者でしみったれた嫌がらせをするわけだ。靴隠してみたりアホウな手紙を机の中入れてみたり。レトロ感満載のわかりやすいヤツをな」

「……」

理子は黙ってしまった。きっとその状況に思いを馳せ心が痛んでいるんだろう。その様子はブリキみたいな心しか持たないゴリにも伝わったようで慌てて言葉を繋げる。

「ままま聞け！でも黙って泣き寝入りする新木サンじゃねえ。俺はオンナを『怖い』と思ったのはあれが初めてだったんだが」

「……！」

ぱっと顔をあげる理子。なんだか……いいやつだなあコイツ。ゴリもちょっとだけホッとしたようだ。

「ウチの授業がイカレてんのはもう分かってんだろ？」

コクコクと頷く理子。この理子やゴリだってそれなりの成績がなければこの学校にはいない。しかしやはりあの授業は異質なものなのか。知識を丸呑みさせるかのような絨毯爆撃。理解など求めない一方通行の教養のなすり付け。

「当然わかんねえ問題とかはあるわけなんだが、お前授業中あてられたらどうする？」

「えーと……黙ってます。だって分かんない問題答えられないよ」

そりゃあそうだ。あの視線の集中する嫌な空気は耐え難いものがあるが、分からないのだから答えようが無い。

「そのいやがらせしてた首謀者がそういう状況にいるときだけ、新

木サンは立ち上がって答えを言うんだ。非の打ち所のねえ完璧な回答を」

「助けてあげるんですか？そのひと達を？」

「そうだ。ソレを毎回。半年続ける。するとどうなる？」

「仲良くなる！」

「いや、理子は多分そうなるんだろうが」

ちょっと寒気がする。毎回そんなことをされれば……

「自分は新木サンより『徹底的に劣っている』と思わされるんだよ。ベンキョーだけじゃねえ。運動だって新木サンにかなうオンナなんかこの学校にはいねえんだ。すべてが敵わない、とゆっくり時間をかけて骨の髄まで思い知らされるわけだ」

そんな事態になれば周りの目も明らかに変わるだろう。一連のいやがらせが、ただ矮小でちっぽけでくだらない僻みにしか見えなくなる。

「なんか……すごいですね」

「ああ。んで、とうとう半年後心をへし折られた首謀者のアホウ共は新木サンにアタマを下げることになるんだが」

「仲良くなるんですね！？」

「いや、……アタマを下げているそいつらに向かって新木サンは言

うわけだ。『なんの話か分からないんだけど』ってな」

……。

……。

……。

おおおおおっかねえええええ！！！！なんてタチワル！！極悪非道！！マジでちょっと引くレベル！！

「ホントに心当たりが無かったのかもしれねえな。新木サンにとっちゃ完璧にどうでもいいことだったんだろう。そこでまた心を四つ折りにされたアホウ共は……新木サンの目もまともに見られなくなりましたってハナシだ」

「ひあああ……ちょっと泣きそうです。わたしちょっと泣きそうです」

ブルブル震える理子。無理も無い。

徹底した決定事項。姉は曲げない、姉自身も曲げられない厳格な戒律。『心当たりが無い』訳が無い。完全に意識的にすべきことを理解し結果どうなるかまで折り込み済みの自覚的な報復。なにより周

到なのは『姉にはそんなつもりはないんじゃないか？』と思わせる手段の巧妙さ。現にゴリは騙されている様だが僕には分かる。姉は全部わかってやっている！ＫＯＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ！！！

「でもな。悪いのはいっつも新木サンの相手側なんだよ」

いつもしてんのか！？おいおい聞き捨てならねえぞっ！！

「最近はそんなアホウは居なくなったから新木サンもそんな影すら見せなかったんだが、まだいたんだなあ、アホウ」

姉の学校での顔。特に生徒会やらやってる訳じゃないのにやたらと高い知名度の理由がちょっとだけ分かった気がした。まあそりゃあ僕みたいな弟がいるなんて知られたくないよなあ。

『あああああんっ！！』

「だからまあ……ほっとけ」

未だに聞こえる泣き声のほうを眺めながらゴリはそう呟くと、思い出したように理子を一生懸命あやしていた。

26

大いに不満だ。ゴリップクというヤツである。
僕は帰り間際のホーム・ルームで頬杖を突いて遺憾の意をこっそり、しかしれっきとして表情で体現していた。まあ大したコダワリも持たずにこの学校に入学した僕なので下調べを一切しなかった。そこは責められてシカルベキなんだろう。なんだろうが……

入学早々「クラス発表会」なるキテレツな催しを誰が、なんの為に行うというのか？僕は自慢じゃないがクラスの生徒の名前さえ２人しか知らない。前に座る『藤崎』、それに横の『智花』。以上だ。大体この学校はクラスの団結とか高校生活における友情なんてものには興味が無かったはずじゃないのか？

「いやあどうしようね新木君。こっちは予習復習で手一杯なのに」

別に授業中ではないので幾分リラックスした様子で後ろを振り返る『リア充』藤崎。

「まあまあ。これさえこなせば後はなーんにも無いんだから。学校もホントになにもしません、じゃ通らないんじゃないの？一応公立だしさ」

『嫁』智花は諦めたように苦笑い。一体誰に対する言い訳なのか僕にはさっぱり分からない。誰得の極みである。……しかし『嫁』はいくらなんでも違和感があるなあ。名前が一緒なだけだし。今後は省いて『智花』でいこう。
……４８文字。

遡って４８文字は完全に省いてもらっても構わない。なんつーかスマンカッタ。

「この時期に発表会って言われても」

「毎回どこのクラスも『合唱』みたいね。無難にこなしておきましょうってトコみたい」

ジャージ教師の声が黒板の前から響く。耳は閉じられないので何の気なしに仕入れた情報によるとこの催しの大義名分はこうだ。
お互いまだ心を開いていない状態であるからこそ意義がある。この機会にお互いの理解を深いものにし、今後の様々な場面で生きてくるような絆を構築しようと……まあ尤もらしくノベてはいるが。友情や信頼が何の役に立つのか？

崖から落ちそうになったときケイン・コスーギのように手を差し伸べてくれる？
崖って見たことねーよ！！

『お、俺はもうだめだ。先に行け』っつってそいつが犠牲になって手榴弾で後続の敵を排除？
そんな勇者はチベットいけ！！日本じゃ出番ねーぞ！！

高校生の、特にこの学校における最大の障壁は勉強なのだ！！あのキチガイ染みた授業に友情や信頼は役にたたねーだろ！！『困った時の為にトモダチくらい作っとけ』としか聞こえねーんだよ！！でっけえお世話だ！！

そんな僕とふとぶつかる視線。遅々として進まない議題に業を煮やしたジャージの口端がぐい、と持ち上がる。

「お、シューゾーなんかある？」

「がが合唱でいいんじゃななないでしょうか？」

ＹＯＥＥＥ

僕はソレでいいんだ。

27

僕は「クラス発表会」で憂鬱な気持ちを引きずりながらも下駄箱へと向かう。理子とゴリが待っているのは最近のお約束だった。すると……

「きゃ！」

「どんくさいなあ。大丈夫？」

文科系の部活なのか3名程の制服の女生徒が階段を駆け上がる際、躓いて転倒しかける。僕はその声に反応し階段を見上げるとチラチラ僕を伺いながらその姿を消した女生徒たち。

「シューゾークーン！」

僕を見つけた理子が駆け寄ってくる。理子のクラスも発表会の相談でもしていたのかいつもより４０分程時間がズレていた。

「ごめん遅くなって！梶センパイは今日用事があるからさき帰ってろって！」

「……そそそうなんだ」

「ん？どしたのシューゾーくん」

僕の態度に何かを感じたのか理子は心配そうに僕に聞いた。敏感な感性。ああ、女の子なんだなあ、としみじみ思う。理子に聞いてい

いものか？でも僕には他に聞けそうな女生徒などいない。

「シューゾーくん？」

僕の袖をくいと引き、声までトーンをオトス理子。
夕方の昇降口。
いつもより遅い時間。
紅く染まり始めた下駄箱の列。
人影はまばら。
僕を見詰める理子の不安げで熱心な視線。
そんな空気に当てられたのか……僕は口を滑らせた。

「り理子」

「なあに？」

「ぱぱぱんつってどんなん？」

「ぱ……え？」

「しし下着」

「パンツ？この？」

理子はスカートの上から自分の腰辺りを両手の人差し指で指す。は

い、そうです。まさにそのパンツです。下着、アンダーウェア、パンティーと言いなおしてもいいが。

「だだダメだよ!?いくらシューゾーくんでも見せないよ!?」

スカートの裾を掴み中腰で後ずさる理子。やはりこいつに聞いて正解だった!!さあどうしてくれようははははははは!!

「……どした?シューゾーくんらしくないよ?」

じりじり距離を開ける理子。ちょっとだけそれより足早に詰め寄る僕。うははははははははは!!

「って、……まままあそれはじょ冗談」

「だよね!びっくりさせないでよもー!」

一瞬にして子犬に戻った理子はピコピコ尻尾を振りながら警戒を解き僕に接近する。当然理子に関しては比喩満載でお届けしているがそう見えるのだから仕方なかろう!!もう犬でいいんだコイツは!!

「ややっぱり恥ずかしい?」

「そうじゃない人いないよ!」

なに言ってんだという目で睨む理子。迫力は、どっかに落としてきたのかスッポリ抜けてはいるが。ってかそうじゃなくて!そういうこと言ってんじゃなくて!!

「さっき、じょじょ女生徒が階段で躓いてさ」

「ん？」

「おおおもいっきりパンツ見えたんだ」

「らっきーってカンジ？」

おどける理子。しかし僕が何を言わんとしているのかは図りかねるようで辛抱強く待っててくれている。僕が口ベタなのを理解してのことなんだと思うとちょっとうれすいい。

「そそその女生徒は、ぼぼ僕を睨んで去っていったんだけど」

「ふんふん。恥ずかしいモンね」

「それって、ぼぼ僕が加害者なのかな？」

「カガイシャ？」

やはり理子はよく分からないようで首をかしげる。首を傾げたいのは僕なんだが。

「わわ悪かったんなら謝りようもあるけど……ぼぼ僕にはパンツの価値がよくわからない」

「カチ？」

見られて怒るということは、そこに何らかの価値を彼女らは見出してるんじゃないだろうか？しかも一方的である。バッサリ一切の思考を停止させ条件反射で被疑者を断罪する程の価値。それがあるん

じゃないのか？
エロゲよりギャルゲが好きな理由も実はコレだ。生々しい女性のニクタイが耐えられないのだ。ＣＧでさえムリなのだからリアルなどオシテシルベシ、だったりする。理解に苦しむ、ではなくてハナから分からないのだった。割とマジで。

怒ってる訳ではない。僕は知りたかった。その印籠のような価値を持ったコダワリを。男に聞いても（ネットだが）「しまぱんはジャスティス！！」位しか返答は無い。これまた思考停止。それでは僕は分からない。かと言って女生徒に知り合いはいない。つい最近まで。
僕はここにきて今その謎に迫ろうとしているのだ！！

「なんかよく分かんないけど」

理子は下駄箱の小さな扉をパカリと開きながら僕を見た。

「そんなに見たいなら……とうっ！！」

掴んだスカートの裾を元気に持ち上げ僕の正面を向きながら見せ付ける。

「体育だったからスパッツでしたー！ざんねーん！」

……いや、そうではなく。

「大サービスですよ！！これすごい事ですよ！！」

ぱっとスカートを降ろし現れたのは耳まで真っ赤な理子の子犬のような人なつっこい笑顔。

「ひやあああ！テレた！！やめとくんだった！！」

ぱたぱた手のひらで顔を仰ぐ理子。

僕は「ざんねーん」の意味や「大サービス」の定義や「テレた」の根底にあるものが知りたかったんだが。

これではまるでヘンタイである。

ただスカートを女の子自らの手で捲らせただけのヘンタイである。

恥ずかしいことさせている事自体に興奮する徳の高い坊主のようなヘンタイ以外の何者でもない。

「もう！！シューゾーくんはヘンタイくんだったんだねー！！」

やややややややっぱりぃいいいいいいいぃぃ！！！！そりゃそうか！！誰が見てもそうか！！

誰に謝ったら許してくれるのコレ！？助けはくるの！？

「かえろヘンタイくん！！」

真っ赤な顔で跳ねるように駆けていく理子。さて問題は。

いかにしてゴリの耳に入らぬよう理子に口止めするかだった。イチローの打率の三倍くらいの確立でぬっころされるぞ僕。

……。

……。

「りり理子！！おおおなか減ってない！？ななんでもおごるよっ！！！」

28

僕は緊張感を漲らせ自宅マンションへと歩く。
こんなにぎこちなくこの歩き慣れた道を進むのはおそらく初めてだった。なぜなら……

「たのしみー！」

駅から反対方向に帰るはずの理子が隣でニコニコしているから。『なんでも奢る』僕は確かにそう言った。すると理子は

「じゃあねじゃあね！！シューゾーくんのウチ行っていい！？」

そう言ったのだ。『自宅を奢る』という言葉が成立するのか否か。日本語の可能性について考慮する間もなく僕はウチに連絡させられる。

僕は購入の際悩みぬいて決めたｉｎｆｏｂａｒＡ０１を取り出すと自宅にコールする。一回、二回、さん……

「新木だ」

なぜかハードボイルドを気取った父が電話にでた。僕は友人を連れて行ってもよいか聞くと構わない、との返事。夕食を同伴する手はずになった。姉はまだ帰宅して無いが伝えておこう……となぜかどこまでもハード・ボイルドの父にイラッとしながら電話を切る。僕は溜息が出そうになるのを我慢して隣の理子にその旨を伝え

「うん！ごはんもいらない！２１時には帰るから！」

既に手配中だった。

とまあ、これが理子と一緒に僕の自宅マンションに向かっている一部始終なのであるが、あの変人の口調につられ回想まで探偵口調になってしまったことをまず詫びよう。え、誰にかって？そんな昔のことは覚えていない。僕はロック・グラスの中の氷を指でゆるゆると溶かしながらオイルの染み付いたジッポーをカチン、と響かせた。

「じっぽ？」

「いいいやいや！ななんでもない！」

眉間に皺までよっていた！なんなんだあの変人！絶対帰ってもツッコまねえからな！！

「どんな人かな？やっぱり怖いの？」

どうやら理子はゴリのハナシで聞いた姉に興味が沸いたらしく、ビビッてたにも関わらず会いたくなってしまったらしい。その意志の強さに憧れるのだとか。

「ここ怖くはないよ。イメージでいうときょ狂犬ってよりはぐ軍用

犬ってかんじかな」

不安そうな理子の顔。子犬で捨て犬の理子からすればどちらにしても恐怖の対象なのだろうか？

「だ大丈夫大丈夫！理子ならききききっと仲良くなれると思うし」

ヤツはだれかれ構わず噛み付く類のオンナではない。油断ならない人種なのは確かだが常に相手に相応の振る舞いをしているように見える。この場合

「へんなトコ無いかな！？大丈夫かな！？」

自分の足元や背中を気にして不安そうにクルクル回っている理子が相手なのだ。理子に相応の対応なんてアタマを撫で回すかゴリのようにとろんと愛でるのが関の山。それに、大概偏屈なオンナだが僕は知っている。夜な夜な〇コ〇コ動画で『わんこ』タグの動画を漁っていることを。つまり理子はヤツの大好物だと言っていい！モーマンタイなのである！

「なんか緊張してきた！どんな人かな？どんな人かな！？」

マンションのエレベーターの中で緊張を隠せないでいる理子はそれでも楽しそうで、とても微笑ましい。

目的階に到着した僕と理子はテクテクと通路を歩いて、先導していた僕がドアを開けると

「つけられなかったか？」

首だけ出して辺りを伺う変人・父がいた。

どうやらハード・ボイルドが気に入ったようなのでそっとしておくとする。

29

僕は理子を先導し自室にカバンをほ放り投げるとダイニングに向かう。所詮マンションなので向かうってほど大層な事では無いが。申し訳程度の廊下の反対側、その扉を開け

「……」

すぐ閉めた。

「どしたの？」

理子は僕の上着をくいくいとちょっとだけ引っ張り僕の動向を伺うが、さてなんなんだコレ？

なんなんだ！！コレ！！

思わずハード・ボイルドになるのも頷ける。今僕が目にしたのは明らかに日常からは逸脱していたのだ。確かに『僕が友人をウチに招く』というのもかなりの非常事態、なんせ今まで一度も無かったことだ。僕は思わずダイニングに通じる扉に両手を突きそのまま倒れてしまうのをなんとか踏みとどまる。

「今回のミッション、困難は承知なのをあえて聞くが……やれるか？」

たらたら汗を垂らす僕。その脇から変人が僕を覗き込んだ。背が僕より２０センチも高い父は新入生の野球部員のように膝に手を突いている。

「ふふ不可能だ」

「お前なら出来る。いや、お前にしか出来ない。私はそう考えている」

「ぼ僕にはて手に余る」

「お前なら出来る。いや、お前にしか出来ない。私はそう考えている」

「いや、だかｒ」

「お前なら出来る。いや、お前にしか出来ない。私はそう考えている」

くっ！！コノヤロウ……僕の目も見やしねえ。

「あ、あの」

全く事情の飲み込めない理子はただ不安げに僕と変人に挟まれどうしていいのか分からなくなっていた。そんな理子に変人は更に腰を落しバッチコーイスタイルで理子に話しかける。多分身長差は４０センチにも達することだろう。

「いらっしゃいお嬢さん」

「はじめまして楠理子です！いつもシューゾーくんにはお世話になっています！」

世話した覚えは全く無いが。それでも勢いよくアタマを下げる理子をぬるい視線で見詰める父。狭い廊下で三人してなにしてんだか。

「楠さんか。いい名だ」

普通だろバカヤロウ。せめて苗字じゃなくて名前を褒めろよ。

「今日は急に押しかけちゃってご迷惑ではなk」

「楠さんのような女の子を迷惑なんて言う様なヤツは脊髄引き抜いてやりますよ。はっはっは」

その喩えどうにかなんねえのかよおっかねえな。

しかし、父の引きつった笑顔から伝わる緊張は隠しきれるものではない。こいつも必死なのだ。『来客』にほとんど免疫のない家庭なのは重々承知していたが、それが同じ日に2人。それも女子高生とくればテンパるのもある程度はしょうがないことだと思う。

「なにしてんのよそんなとこで。お父さんも早く座って！」

ドーベルマン古都（姉）はダイニングの扉から顔を覗かせる。僕の記憶ではコイツもウチに友人を連れてきたことなどなかったはず。それなのに。

「おおおじゃましてます！！」

ダイニングに先客。ゆるく余裕を持たせたゆったりとしたパーマに高校生にはあるまじき色気を発散した異分子、カプセル・トイのオンナだった。

風貌に全くそぐわないワタワタした落ち着きのない目線。絶え間なくこすり合わせる手のひら。なんでコイツがここにいるんだろうか、理解がとても追いつかない。まるでヒトゴトのように現実感が無い。

「ひひヒサシブリ！！ゲンキダッタ！？」

その場で立ち上がり僕にメカニカルな挨拶を繰り出すＤＱＮオンナ。それでもやはり持って生まれた素質なのか、見慣れた光景であるダイニングは嫌味なほど華やかに染まっていく。あの時は薄暗くてよく分からなかったが化粧を差し引いても十分整った顔立ちだと思う。

しかし……

「……？」

こんなキャラだったろうか？今のＤＱＮオンナは随分余裕がナイ。と、いうか錯乱状態１歩手前の半歩進んだところのように見える。

「周蔵も！突っ立ってないで座る！あなたは……」

「楠理子です！はじめまして！」

「理子ちゃんね、はじめまして。座って」

姉は柔和な笑顔で理子を迎え入れると、理子はぴんと尻尾をたてて付き従う。アイドル歌手をみるファンのように口は半開きで姉の背中を眺める理子。

「柚木さんもいつまでも立ってないで座りなよ」

しんと静まるダイニング内。全ての人間が姉の支持で椅子に座る。
運ばれてくる料理が載った皿をテーブルに置く「コトリ」というささやかな音が悲鳴のように聞こえるのは気のせいか？

「な、なんだか華やかな食事だなあ！」

空気に切り込む勇気ある発言。
そうだ！この謎の沈黙を何とか出来るのはダイコクバシラのあんただけだ！！頑張れ変人！！

「キャバクラ来たみたいで落ち着かないよ！はっはっはっはっはっは！！」

……言葉を選べよバカヤロウっ！！
思いついた事そのまま喋ってんじゃねえぞコラっ！！！！

30

臆病な者、力の無い者は総じて周囲の状況変化に敏感なものだ。
自らの保身の為努力するのは生物にとって当たり前且つ遺伝子に刻まれた命令であり異を唱えるものは少ないだろう。
今、僕の父であり変人のカレは今まさに危機を敏感に察知し生きる努力をしていた。

味噌汁を飲みながら次のおかずに箸を刺しソレを口に運ぶ途中でご飯を手に取る。流れるような一連の動作は熟練のＴＯＹＯＴＡライン作業員のようだった。一秒でも早く与えられたミッションを多くこなすことに魅せられた職人たちのロンド。世間話のついでにこなす恐るべき精密作業。
この父を見ているとまだまだ日本は大丈夫なんじゃないか、そう思わせてくれる頼もしさがあった。

まあ、やってることは一刻も早く食事を済ませ自室に逃げ帰ろうとしてるだけなんだが。

相も変らぬ静寂の中箸の音だけが響く一見華やかな食卓。姉はいつもあまり喋るほうではないしＤＱＮオンナの箸が進まないのもなんとなく分かる。初めてのウチでいきなりガツガツ食事する豪胆なオンナなどいないだろうから。

「理子ちゃんおかわりは？」

「いたらきまふ！」

あ、いた。

僕は料理など出来ないから分からないが、やはり沢山食べてもらえる方が嬉しいんだろうか？姉は少しだけ上機嫌に見える。頬袋に詰め込んだ食料をモグモグしながら姉にニコニコと話しかける理子。

「古都センパイはお料理上手なんれふね！おいしいれふ！」

「そう？いっぱい食べてね」

マンザラでも無さそうな笑顔がキモチガ悪い。

以前姉は言っていた。

料理なんて誰でも出来る、本屋に行けば作り方は分かるしテレビでは頼みもしないのにこう作れと指示される。大事なのは徹底すること。分量、材料、調味料を数字どうりに調理すれば出来ない理由が無い。出来ない人間はありあわせのモノで代用したり個人的な嗜好を取り入れるからだ。数学と同じで自己流では答えが違ってくるのも当たり前、と。

『料理は愛情』を真っ向から否定する実に姉らしい論だと思う。言ってることは分かるが今の姉の笑顔を見ると単にロジックの結果ではないナニカがあるような気がするが……余計なことは言わない僕はヘタレ・ダンディー。

「おいしかった！ごちそうさま！」

早っ！？僕がダンディーぶってる間に父の皿は綺麗に無くなってい

る！！

「私は読みかけの吉本ば○なの詩集があるから失礼するよ。皆さんごゆっくり」

そう言って皆を煙に巻くと父は笑顔で背中を向ける。あんなアタマのおかしいオンナの詩集など読んでなにに役立つのだろうか？

「たまにはアタマのおかしい女性の文章もいいぞ！現実逃避には持って来いだ」

はっはっは、と僕の肩をポンと叩き自室に引っ込む父。

……だからさあ！！てめえは思ったことを素直に口にするんじゃねえっ！！素直が美徳なのは小学生までなんだよっ！！

「ああ、言い忘れた」

ひょいと再度父登場。まだおかしな毒を吐き足りないんだろうか？全くコイツは変ｊ

「古都は思い込みが強く付き合い難いかも知れないし、こっちのこいつは引きこもりの肉団子なんだが」

「……肉団子？」

「……肉団子？」

「……」

ＤＱＮと理子が気をつかいながらこっそり僕を見たが、僕はヤツを

告訴する算段で忙しい。法的な手段に訴えよう。

「2人とも真っ直ぐなイイやつなんだ。柚木さんも楠さんも仲良くしてあげてほしい」

どうか、よろしくお願いします。と父は頭を下げた。

「いや！そんな……こっちこそ！！」

立ち上がったDQNはブンブン両手のひらを振り汗を拭いながら恐縮している。初対面のオッサンにアタマ下げられるとは思ってなかったんだろう。

「大事な友達です！こっちもよろしくお願いします！」

ニヒと笑う理子は父に向かって頭上げてくださいと声をかけた。後輩気質の理子は体育会系のスキルを発動させている。

姉は照れくさそうに苦笑いしながら頭を掻き、やめてよお父さんと力の無い口調でぼやいた。

つい最近まで寄り合い所帯の出来合い家庭だった我が家のささやかな変容。

僕は以前ほど寒気を感じることも無く、ずずと黙って味噌汁をすすった。

おいしかった。

31

変人・父の三文芝居により幾分打ち解けた感のある姉とＤＱＮ、それに理子。愚民は単純でシンプルだからコロッと騙される。逆に羨ましい。せいぜい偽りの団欒を楽しめばいいんだ。そして僕はネットという荒波に人知れず漕ぎ出そう。玉石混合、魑魅魍魎の跋扈する世界の真理に一番近い、あの場所へ！

さあ立ち上がれ！勇気を奮い立たせいざ自室へと！そこで待つものが絶望だろうと後悔だろうと僕は振り向かない！戦いの舞台、２７型ミツビシ製液晶モニターの眼前へと

「周蔵」

「ひゃ、ひゃい！」

「リビングにいなさい」

「ららららじゃー」

暴君・姉のトップ・ダウンによりリビングでの待機を余儀なくされました。

かちゃかちゃと台所で洗い物を進める姉は僕の位置からは背中しか見えないがきっと何か企んでいるに違いない。なにやらそういう空気を発散している。

僕は僕で聞きたいことも無いこともない。リビングのソファーで自分の膝を凝視しながら座っているオンナＤＱＮ。コイツの役割はなんなのか？僕が知らなかっただけで真実姉と友人関係にあったとも考えられるが……どうにも違和感が付きまとう。

「周蔵」

姉の背中越しの呼びかけ。

「お姉ちゃんあんたに聞きたいことあるの」

おお『お姉ちゃん』!?もう嫌な予感しかしねえ!!和やか製造機、人間関係緩和剤の理子はどちらに!?出番だぞー!!

「センパイお皿拭き完了しました!」

「うん、ありがとう理子ちゃん!理子ちゃんも座ってて」

「はーい!」

とっくに骨抜きである。理子はひと仕事終えた爽やかな笑顔でリビングの絨毯にペタンと座った。残像が見えるほど尻尾を振って。牙を抜かれた捨て犬……お前は今日、今から只の使えない室内犬に堕落したぞ。

「で、あんたさ」

「?」

姉はタオルで自分の手を拭きながら振り向く。

「理子ちゃんと付き合ってんの?」

「……!?」

反応を示したのは理子。尻尾がピタリと止まり電池切れのアイボのような無機質な佇まい。カチーン、という表現がぴったりの理子には珍しい光景だった。

「ややめてください古都センパイ！そんな訳ないです！」

「……？」

何を言い出すかと思えばこの色ボケ姉。まあコイツも所詮女子。即物的な思考しか持ち得ないメスなのだ。この手の話題が好物だったとは知らなかったが、血迷うにも程がある。僕は3次元は苦手なんだと一緒に暮らしていても理解しないとは。僕は愚かな俗物であるところの姉に憐憫の情を抱かずにはいｒ

「でも今後、そうなったらちょっといいなとは思わなくも無いです！はい！」

おおう。言ってやれ言ってやれ。
この破廉恥な俗物にもっと己の愚かさを自覚させるような辛らつな皮肉を突き刺してやるのだ理子。なかなかどうしてコイツもワルよのう。

「……！！」

ものすごい勢いで立ち上がるＤＱＮ。なんだよ、そのまま天井刺さるんじゃないかと思ったじゃないか。ん？お前も愚かな姉に一家言ありそうだな。どんどん言ってやれどんどん。

「あたし、……そうなったらスゲー困るんだけど」

おおう?言葉の意味はよく分からんがとにかく（以下略）。姉とて悪気があったわけでは無いのだから。まあ2人ともその辺で許してあげてもよかろう。愚かなことは罪ではない。ほーれ、今にも泣き出さんばかりのあの姉の……

ん?

「はいどーすんのあんた?」

まさにメタル・ハート。余裕シャクシャク。コイツの心臓はふっさふっさに毛が生えてるのか?ＤＱＮと理子にここまで辛らつに皮肉られ尚揺るがない姉に乾杯!

……。

……。

どーすんのって……なんだ?

姉４（ちょっとだけ変更アリ）

アホ面だ。結果は分かってはいたがこうも見事にアホ面を晒されては笑うしかない。

「あー。ちょっと柚木さんいい？」

私は柚木さんの袖を引き立ち上がる。我ながら余計な事をしてるなと思うが、これでは余りにも柚木さんが可哀想だ。見てよあのバカのアホ面。

全く分かってない。自分が立っている場所を理解できていない。

「あ……ちょっと」

「いーからいーから」

柚木さんは理子ちゃんとバカを残してこの場を去ることに抵抗を覚えているようだが、多分心配するような事にはならない。理子ちゃんの気持ちはまだ漠然としたものだし、なによりバカ相手にどうこうしようが無い。

「どどどこいくの？」

バカはアホ面でそう言った。

「作戦会議よ。理子ちゃんは寛いでて」

「はい」

こころなしか顔を赤らめている理子ちゃんはそれなりに状況を把握しているのか、先ほどまでの無邪気さは薄れている。恋愛とは経験則に縛られがちなモノなので、理子ちゃんは過去に好きな人なり彼氏なりがいた経験があるのかも。だって表情に色気があるもの。

……。

私はじっとバカを見る。

「……なななんだよ。言っとくがよよ吉本○ななアタマがおおおかしいって言ったのは僕じゃ」

……ダメだこりゃ。

精神年齢は女性の方が総じて高いとは良く聞くが、もうそういう問題じゃないのよね。なんで柚木さんみたいな綺麗なコや理子ちゃんみたいな可愛い子がこんな大バカヤロウに好感を持っているのか？つくづく恋愛ってのは勘違いと思い込みの産物なんだと再確認させられた。

「冷蔵庫にケーキあるから。理子ちゃんも食べてね」

「あ、ありがとうございます！いただきます！」

ぺこりとアタマを下げる理子ちゃん。……ホントかわいいなあこのコ。いや、柚木さんだってものすごく可愛いんだけど。全く理解に苦しむよ。

私は自室まで柚木さんを引っ張ってくるとベットに腰掛ける。柚木さんはへなへなと絨毯に崩れ落ちるように座った。随分消耗したらしく苦笑いまでが余裕を失っている。

「やっぱり……ダメっぽい。あたし完敗？」

自己判断では劣勢と踏んでいたようでがっくり肩を落とす柚木さん。真剣な表情。理子ちゃんの事を恨む訳でもなく周蔵への気持ちを誤魔化すわけでも無い。不器用で、真摯な態度。だから私は彼女をほっておけない。

「その前にちょっと聞いて欲しいんだけど」

「……？」

なんて言えばいいんだろうか。私は思索を巡らせる。そのうち通学路に暴走した馬が現れて蹴り殺されない事を祈りながら。

「柚木さんは兄弟いる？」

「え……兄貴が１人」

「好き？」

「キモイ」

「近しい関係の人間には嫌悪感を抱くのは普通よね？」

「そ、そりゃそうだと思うよ」

「その理由は単にみっともない姿を日常的に見てしまっているとか、近親婚を避けるための遺伝子の命令だとか、……まあ私は学者じゃ

ないし詳しくは知らないけど」

「……？」

柚木さんは私の意図が分からないようで難しい顔をして聞いている。分からないだろうなあ。私だって想像しただけだから自信無いんだけどなあ。

「今の構図の『枠』をね。ちょっと拡げてほしいの」

「わく？」

自信ないなあ。言いたくないなあ。

「例えば神様とか天使とか、何でもいいけど居たとして」

「……う、うん」

「憧れてたり、崇拝してたり……してたとするでしょ？」

「？」

「するとね。近しい存在は『ニンゲン』でしょ？神様よりは。ハナシも出来るし触れるし」

「そ、そうなる……の？」

「で、さっきの話の構図に当てはめると。周蔵にとって嫌悪感を抱くべき『近しい存在』なのは人間ってことになってるんじゃないかなあ？」

神様の席に『アニメキャラクター』が胡坐をかいているのは内緒だ。

「か！かなあってなによ！？」

激高する柚木さん。ああ、このコもやっぱり可愛いなあ。真っ直ぐだなあ。

「昔ちょっと考えてたんだけど、なんか途中で違うような気がしてきちゃった（テヘ）」

「ななな！！なに舌出して似合わないコトしてんの！？真面目に聞いて損したっ！！」

「ご、ごめん。でも昔はホントにそんな事考えちゃうくらい人間嫌いだったんだもんアイツ！」

「なんだよ！もー！！……もーっ！！」

そうだ。

周蔵も昔の周蔵ではないのだ。

アタマを私の目の前で掻き毟る柚木さんだって愛らしい。理子ちゃんだってスゴク可愛い。

やはりこの手の問題は他人が口を出すべきことじゃないんだろうな。

なんて無責任に思ってしまった。

「あんたにしか頼めないんだよっ！！真面目にやってくれない！？」

涙目をふるふる振るわせて私に詰め寄る柚木さん。

「……ごめんカナ。ちゃんと応援するから」

一瞬目がテンになるカナ。私はこの不器用なコの事をそう呼ぶことにした。

「あ、あぁ。ホント頼むよ……古都」

わしわしわしわし。

せっかくの綺麗な髪が台無しである。全く、外見ばっかり派手で華美。そのくせ不器用で気が弱く涙もろい。アンバランスな陶磁器人形に命を放り込んだような不思議な子のことを私は少し気に入ったのだ。

・・・・・・

ちょっとだけ周蔵みたいだ、そう思ってしまったから。

「……なに？」

私はカナに問う。カナの視線がさっきから私を捉えてウルサイくらいだ。

「なんでもない」

一切解決を見なかった『作戦会議』。

それでもカナはなぜかうれしそうに清々しい笑顔を私の部屋に振り

まいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4799x/

ベクトルマン

2011年10月21日11時02分発行